

2章 調査結果

2-1-1. 回答者属性（フェイス項目）

1) 個人属性

既婚率は68%である。

2-1. 調査結果の概要

全項目（自由記述設問を除く）と性別・年齢層（5才階級）とのクロス集計結果を、付属のCDに収録した。

主な結果は本項で示すとおりである。

世帯属性は「親子の世帯」が半数以上（53%）でもっとも多い。同居している子どもの年齢が小学生以下という世帯は32%で、「親子の世帯」の半数弱を占める。また、65歳以上と同居している世帯は20%で、三世代以上の同居世帯に多い。

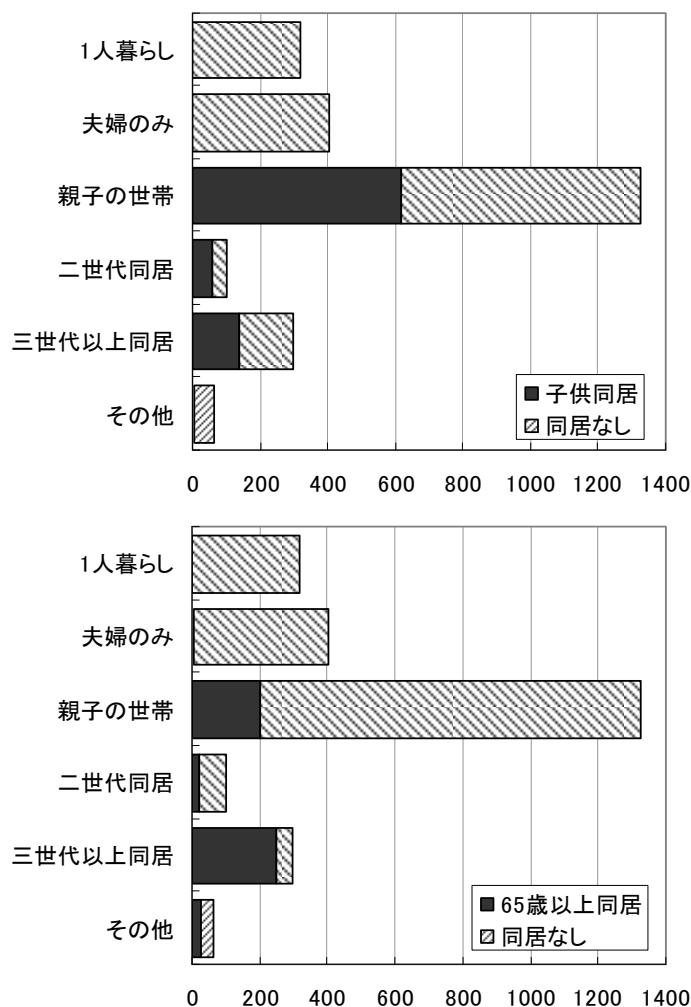


図2-1 世帯属性

職業は、会社員が4割（男性が主）、専業主婦が2割（女性が100%）と多い。「平日自宅にいるか否か」と関連が大きく、専業主婦と無職で「平日自宅にいる率」が高く、会社員などで低い。

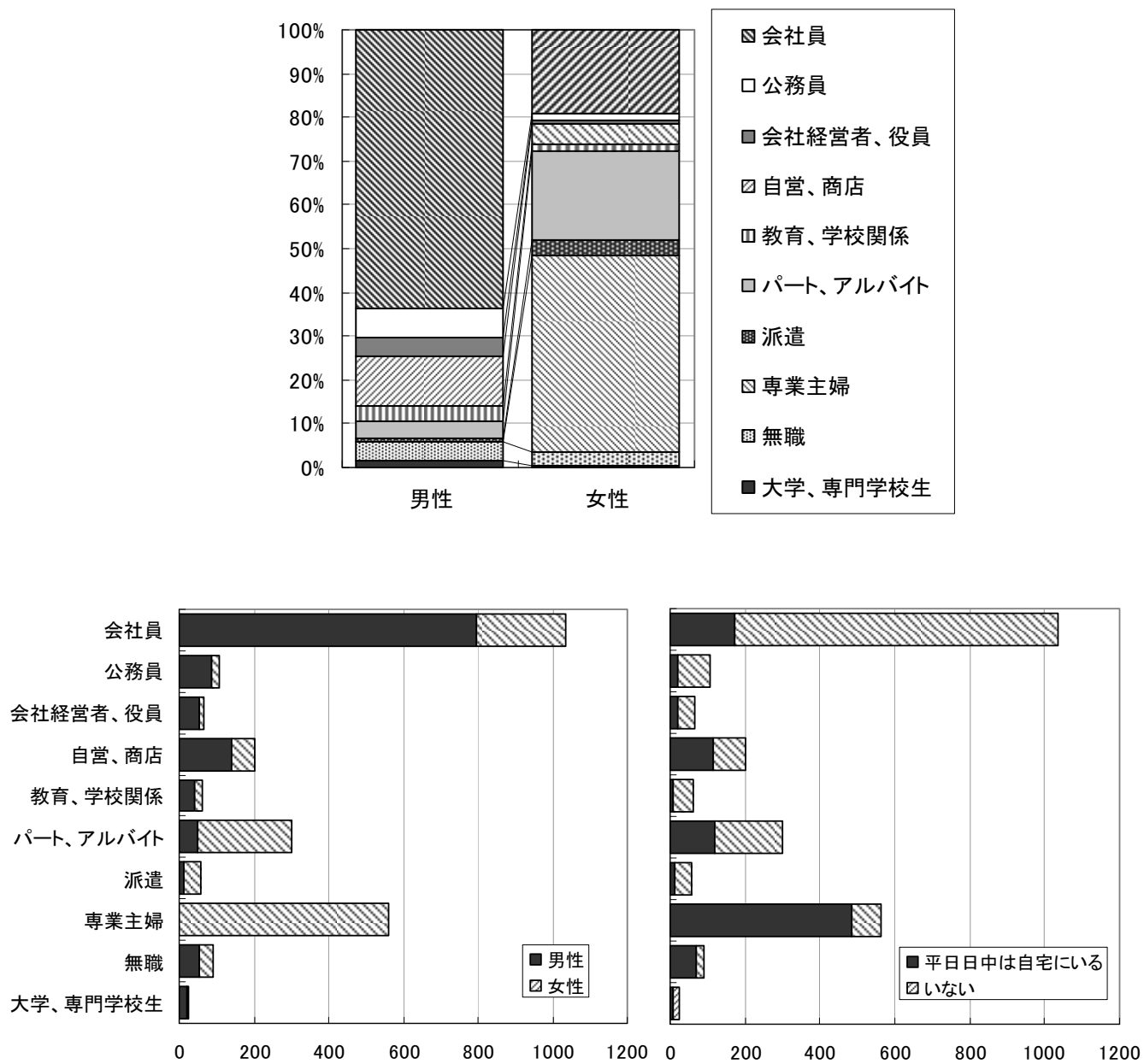


図2-2 職業

年齢は、さまざまな項目に関連している。以下に、年齢があがるにしたがって経験値があがる主なものを示す。

- ◆ 子育て経験は30代でぐんと上がり、40代前半まで単調増加（子育て中または子育て経験ありは全体の52%）。

- ◆ 介護経験は全体的に少ないが（介護中または経験ありは全体の12%）、50代前半で少し多くなる。
- ◆ 近所の人に合う機会は40代後半まで徐々に多くなる。子育て経験の増加傾向と似ている。
- ◆ 一戸建て住宅および持ち家は30代後半と40代前半では差がないものの、他の世代では徐々に高くなっている。

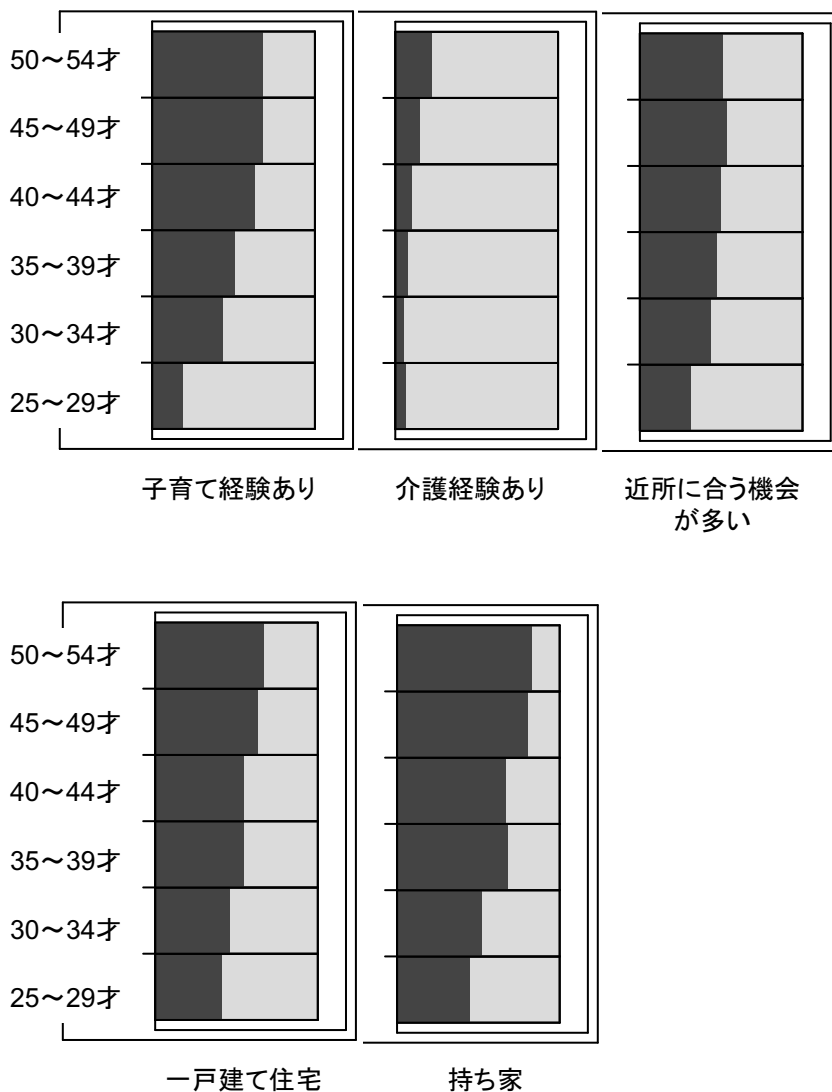


図2-3 年齢

性別で大きな差があるのは、前述の職業およびその関連（平日日中の居場所等）だが、子育て経験・介護経験ともに女性の方が多いという若干の差が見られた。

意外だったのは、近所の人に合う機会の多さに性差がなかったことである。通常、「近所づきあいの程度」は女性の方が深い。今回の調査では「近所づきあいの程度」は項目数の関係で聞けなかったのだが、「近所づきあいが良好な地域である」という認識には男女差があった（下記）ことから、今回も「近所づきあいの程度」は同じ傾向であったのではないかと推測できる。

- ◆ 「近所づきあいが良好な地域である」という認識では、女性に「どちらともいえない」が多く、男性に「そう思う」「そう思わない」のどちらも多いという結果であった。

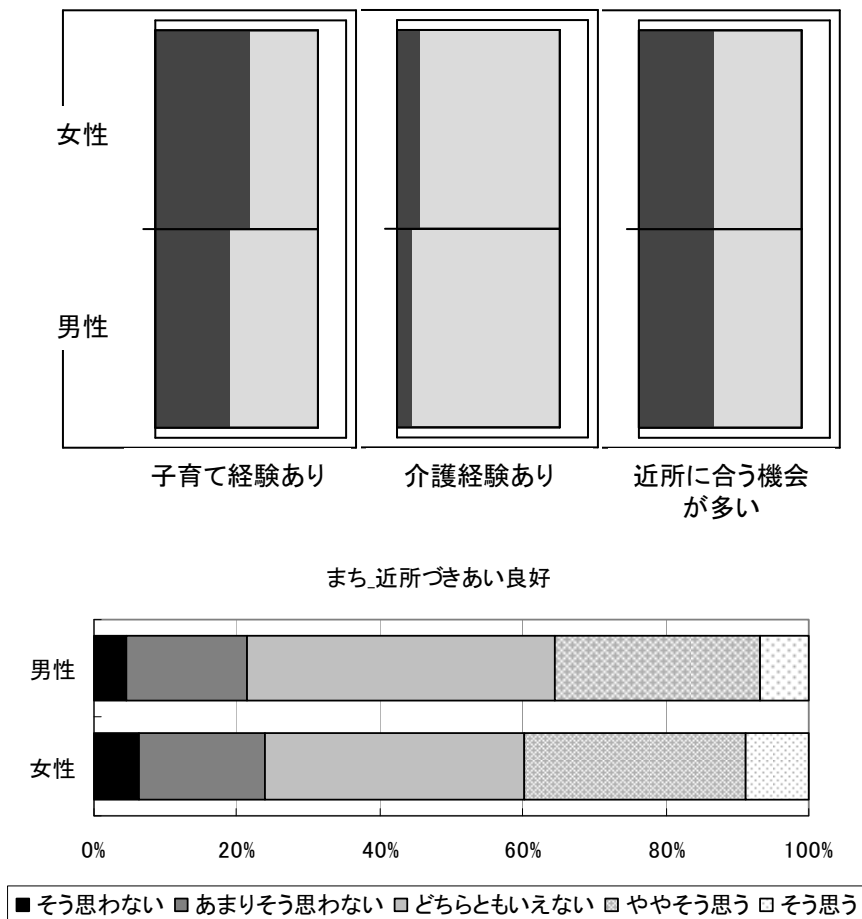
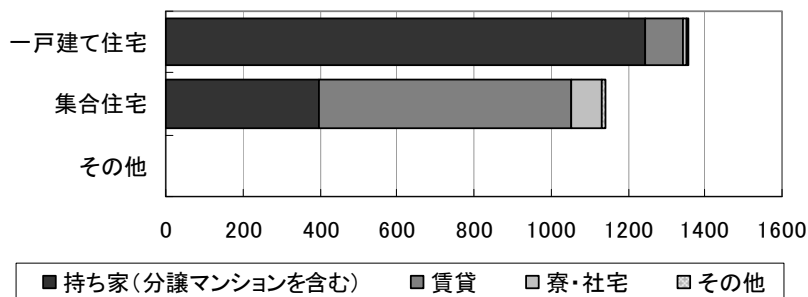


図2-4 性別

2) 住居・居住地域

住居は、集合住宅より一戸建てが多い。両者で所有形態に差があり、一戸建ての多くは持ち家で、集合住宅は半数以上が賃貸という結果であった。

なお、集合住宅のうち、オートロックがあるところは34.9%（モニターつきは18.1%）、防犯カメラを設置してあるところは35.4%であった。これらの割合が高いのは、「賃貸」よりも断然「持ち家」であった。



オートロック

防犯カメラ

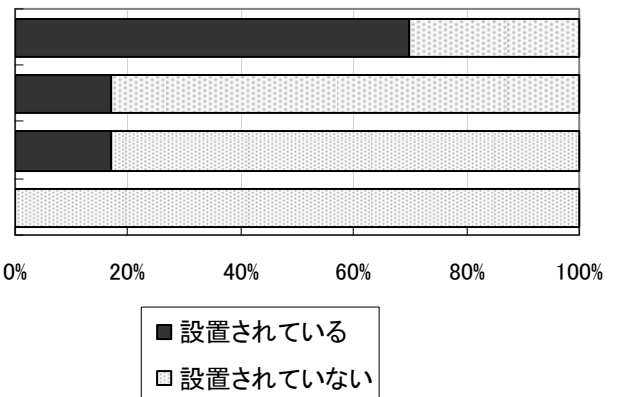
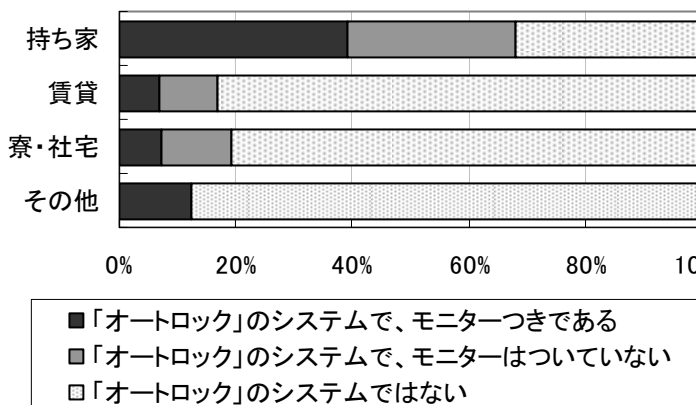


図2-5 住居

居住地域のタイプは、「郊外」が 52%、「都市」が 32%、「田舎」が 16%という結果であった（設問は「ご自宅周辺の地域は、以下のどれに近いですか。」 S A）。首都圏・近畿圏・その他とのクロス集計を見ると、首都圏が一番「都市」より、その他が「田舎」より、関西圏が中間であることが分かる（図 2-6）。

この居住地域の 3 タイプと、自宅周辺地域の環境評価（MA、0-1 データ）および首都圏・近畿圏・その他の対応分析を行った結果（2次元布置図）を、図 2-7 に示す。図では、都市、郊外、田舎が馬蹄形上に並んでおり、ほぼ一次元と解釈できる（ $c1=92.3\%$ ）。

「都市」は高層建物や店舗・飲食店、人が多く、建物が密集しており、風俗営業チラシが多く、交通量や路上駐車などが多い、「田舎」は農地が多く、山や川や海があり、人気（ひとけ）はなく夜道が暗い、等の特徴が明確に現れている。

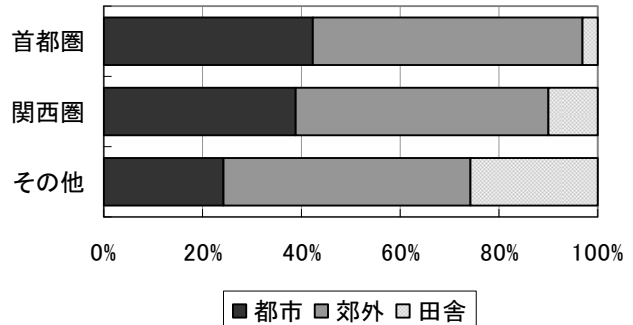


図 2-6 居住地域の 3 タイプ × 居住地域

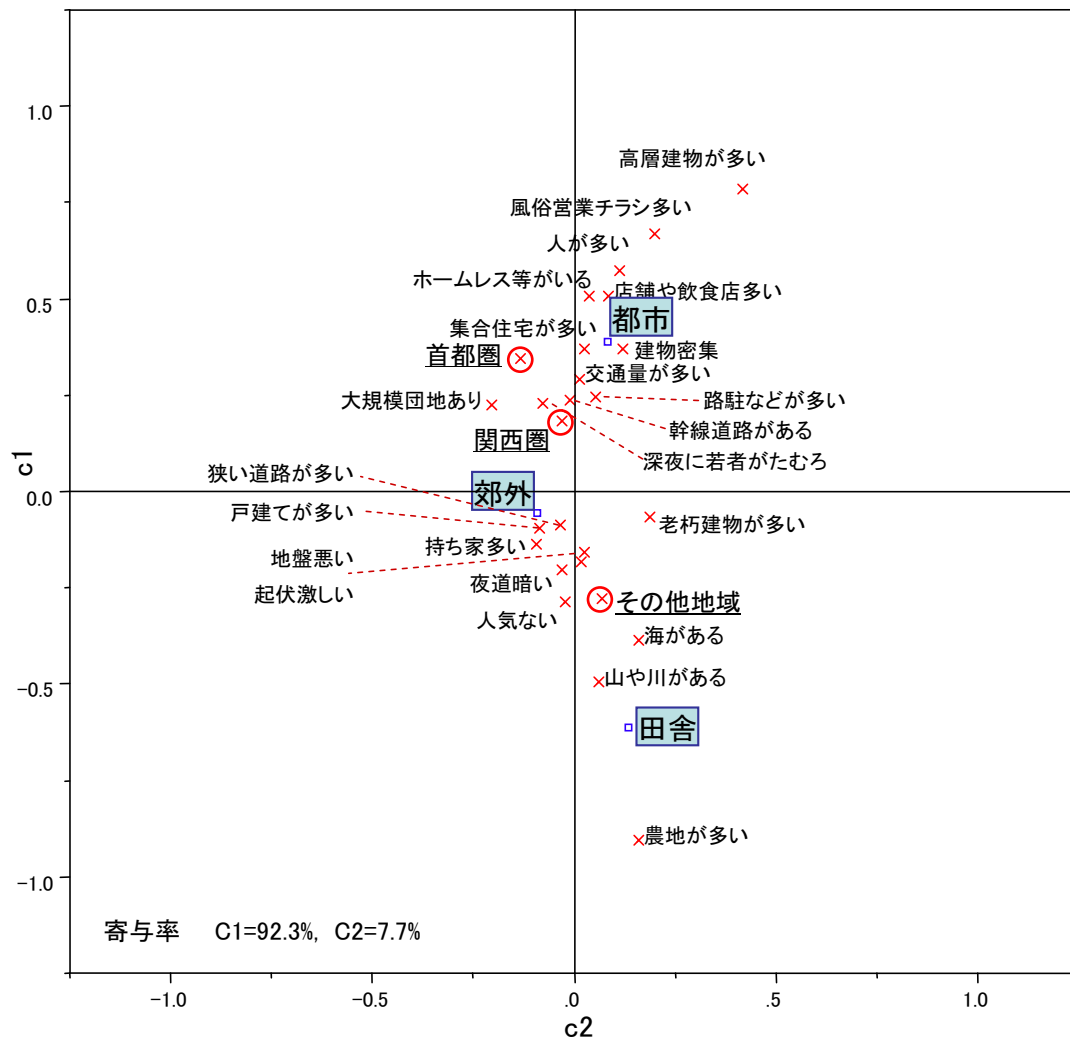


図 2-7 居住地域の 3 タイプ × (自宅周辺地域の環境評価 + 首都圏・関西圏・その他地域) の対応分析結果

3) 事故や災害にあった経験

全体的に事故や災害にあった経験自体が少ないという結果であった。とくに、火災をはじめ、地震や地盤災害などの被害を受けた人はごく少数である。

そのような中で、「近隣トラブル」の経験者が多いことは注目に値する(なかでも「自分も家族も」が多数)。全20項目をひっくるめて、とくに重大だった被害について具体的な記述を求めたところ(未必須)、やはり近隣トラブルに関するものが目立っていた。以下が、その例である。

- ◆ ちょっと変わった住人が近所にいて、すぐに刃物を持ってきたり、「殺してやる」と言う・・・
- ◆ 隣家に精神状態の悪い婆がいて、被害を受けた
- ◆ 直接被害はないが、近所に常識のない人が多くよく警察が来たりするので不安
- ◆ 4年間毎日の様に裏の家から嫌がらせを受け、悪口を言われたり、庭の木やフェンスを壊された
- ◆ 隣の地主に脅された
- ◆ 近所で騒音問題が起こった際に加害者と思われた

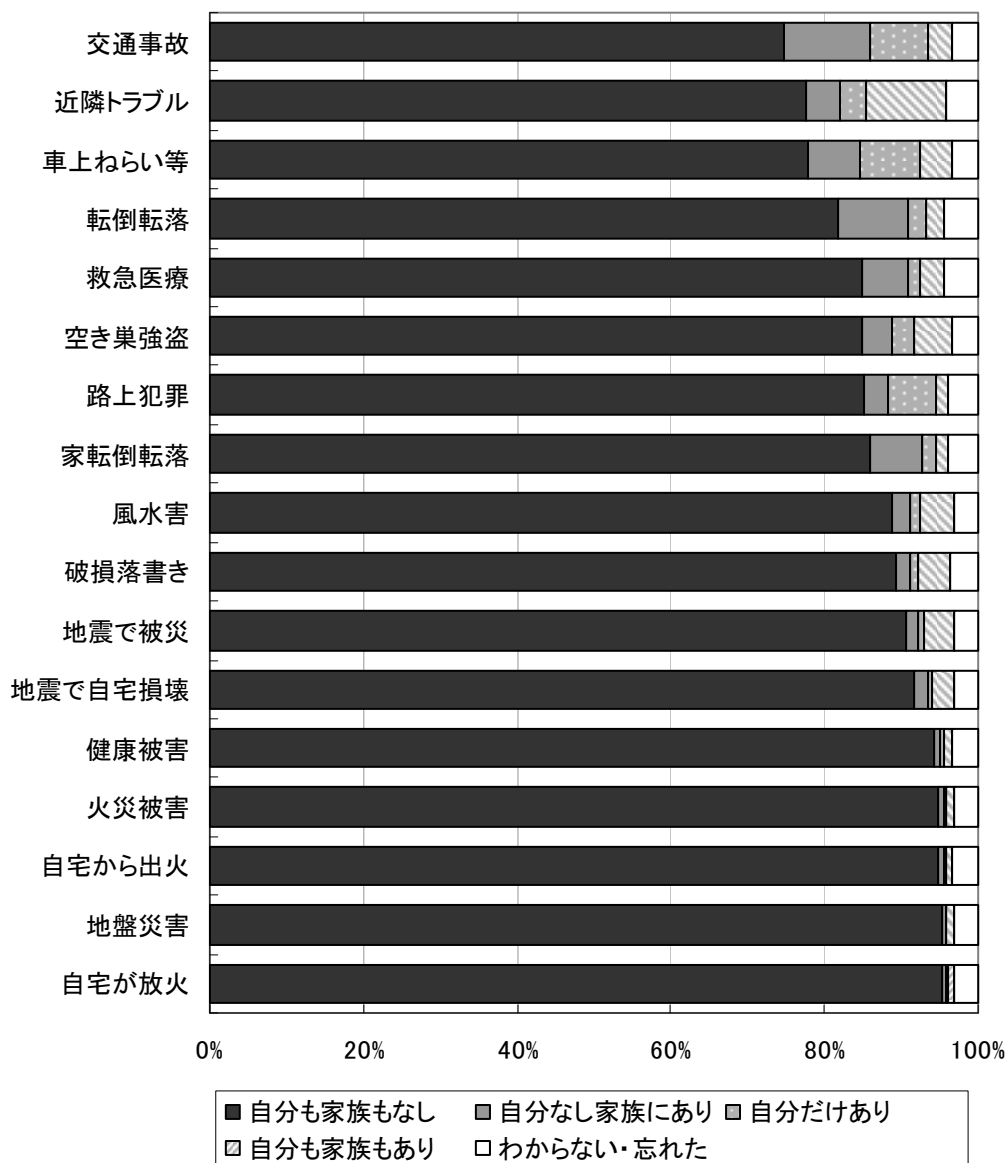


図2-8 事故や災害にあった経験 (Q14)

2-1-2. 「認識・評価」

1) 事件事故の多さの認識

最近、自宅周辺について事件や事故はどの程度起きていると感じているかを「多い」から「少ない」までの4段階で聞いた設問(Q13)であり、当然、同じ設問内、また「不安度」「安全・危険度」など、同じような内容の設問との相関は大きい。

ただし、「不安度」等とは異なる傾向も見られる。たとえば、「不安度」等は、ただの「交通事故」ではなく、「子どもの交通事故」というように、「子ども」や「高

齢者」に限定すると上昇する傾向があるが、「事件事故の多さの認識」では、この傾向が現れていない。

なお、子どもと同居している世帯では、「子どもへの犯罪」「子どもの交通事故」を通常より多いと認識している。ただし、転倒転落事故については差がない。

高齢者と同居している世帯は、子どもの場合のような傾向は見られない。むしろ「高齢者への犯罪」については通常より少ないと認識している。

これは、年齢が上の方が地域を安全と認識しているせいではないかと考えたが、必ずしもそうはいえなかった。今後検討したい。

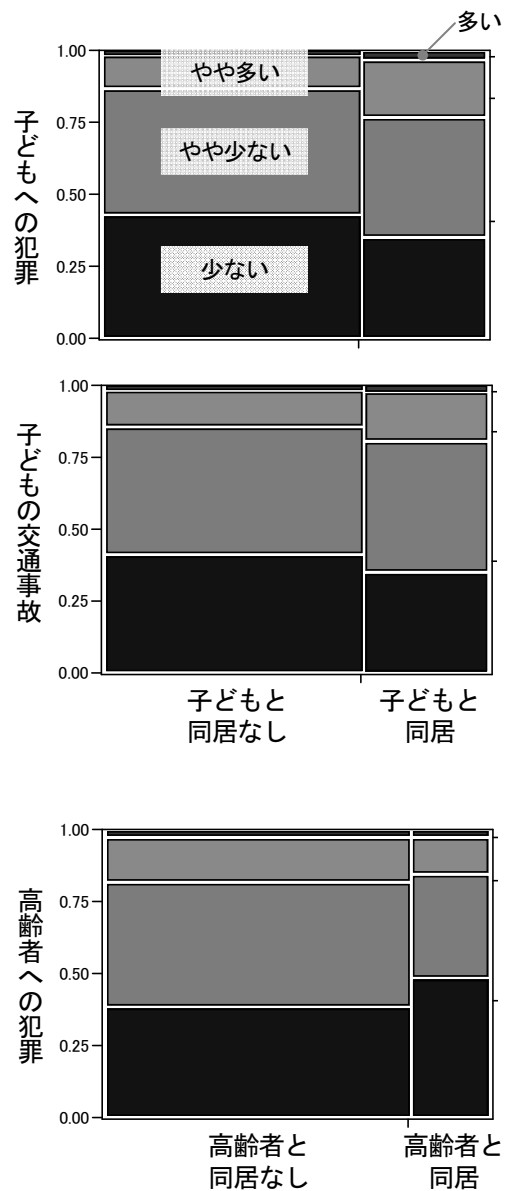
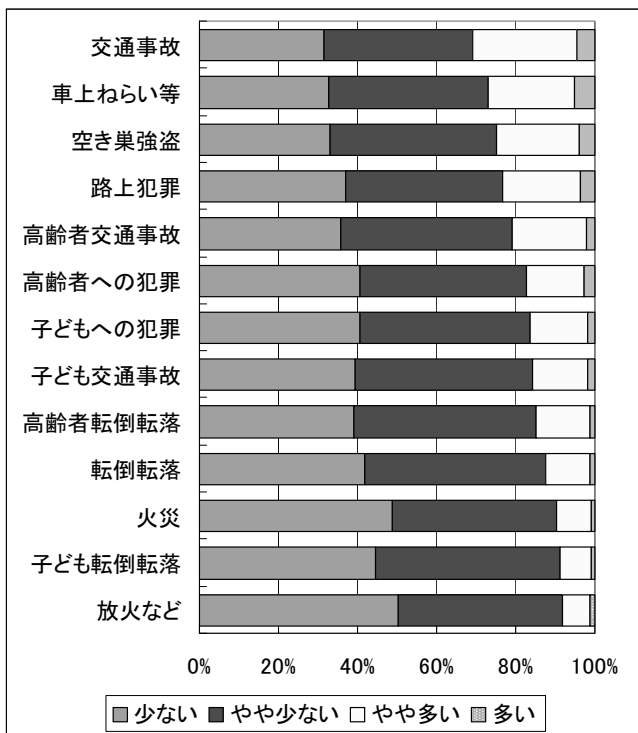


図 2-9 事件事故の多さの認識 (Q13)

2) 不安度

現在の生活で感じる不安感や心配の程度を、5段階で聞いたところ（個別20項目：Q7）、不安度の高さは項目ごとに大きく異なっていた。

不安度が高い項目には、居住地域や対策の如何によらず発生可能性があるもの（地震、交通事故等）、万一発生したら深刻な事態が想定される非日常的な犯罪や事故（空き巣強盗、路上犯罪、火災）が多い。

不安度が低い項目に「風水害」「地盤災害」があるが、これは常襲地域がほぼ限定されていること等の影響が考えられる。

ただし、全ての項目で「まったく感じない」「大いに感じる」という極端な意見は常に少数派だという特徴があった。

図2-10の下側の2行は、居住地域と自宅に関する総合不安度（Q6）の結果だが、ここでも「まったく感じない」「大いに感じる」は非常に少ない。この総合不安度で、不安がある側を選択した人に対し、不安内容の具体的な記述を求めたが、「なんとなく不安」「どこであろうと不安」といった曖昧な記述も少なくなかった。

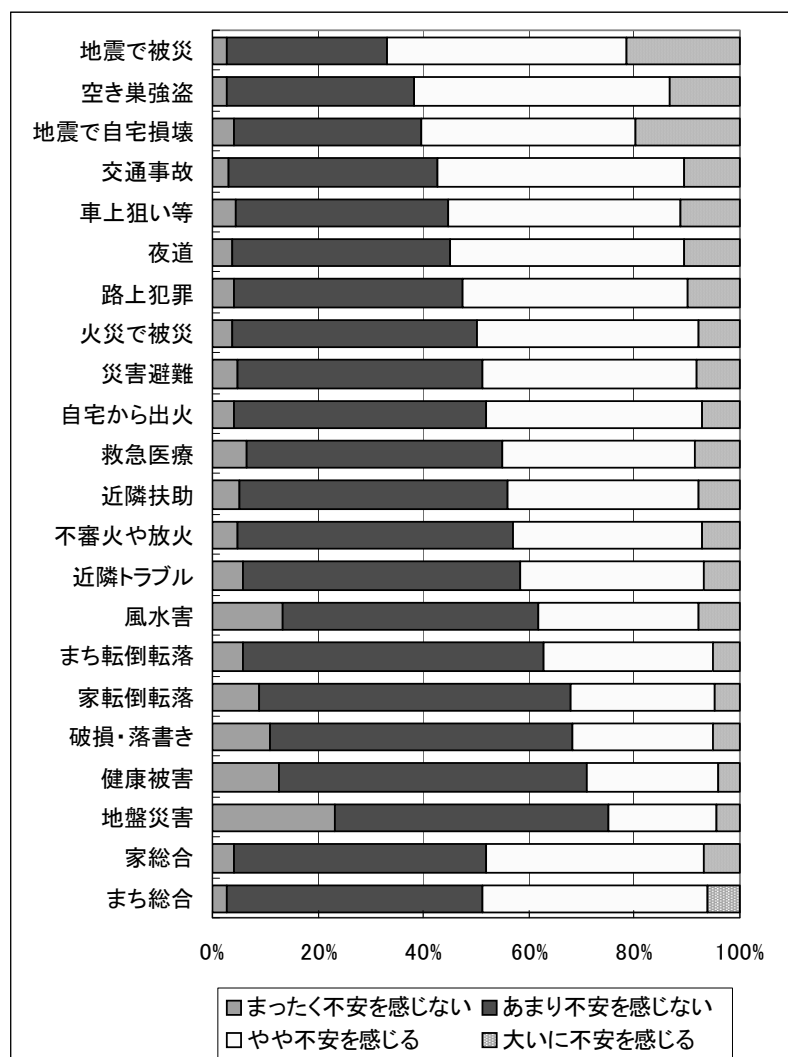


図2-10 不安度（個別20項目：Q7、総合2項目：Q6）

「小学生以下の子ども」「高齢者」に限定して聞くと(Q8)、各項目に対する不安度は、限定していない場合に比べ高くなる傾向が見られた。

また、どちらかに限定したかで、不安度が高くなる項目が異なっていた。たとえば、「交通事故」や「犯罪」はとくに子どもで、「転倒転落」はとくに高齢者で不安視されている。

ただし、総合的な不安度については、「子ども」「高齢者」に限定しても、限定しなくてもほぼ変わらない。

たとえば子どもについては、限定した方がむしろ不安度が低くなっており、ワーディング*の影響等も考えられる。

*「現在の住まい（自宅および地域）で、子どもが生活することへの総合的な不安」を、「大いに不安を感じる」～「まったく不安を感じない」

子どもや高齢者と同居しているか否か等、関連する属性による不安度の違いも見られた。

「子ども」に限定した場合の不安度は、全て、現在小学生以下と同居している人、および子育て経験がある人（子育て中を含む）で顕著に高かった(図 2-12。全てで有意差あり)。現役子育て中（同居者）だけでなく、すでに現役でない人でも、子どもに対し敏感であり続けていることは興味深い。

「高齢者」に限定した場合の不安度は、子どもの場合とは異なる。現在 65 歳以上と同居している人で顕著に高いのは「転倒転落」のみである。一口に「65 歳以上」といっても多様なので、子どもと異なる結果になったと思われる。なお、介護経験がある人（介護中を含む）では、「高齢者」に限定した場合の不安度全てが顕著に高いという結果であった。

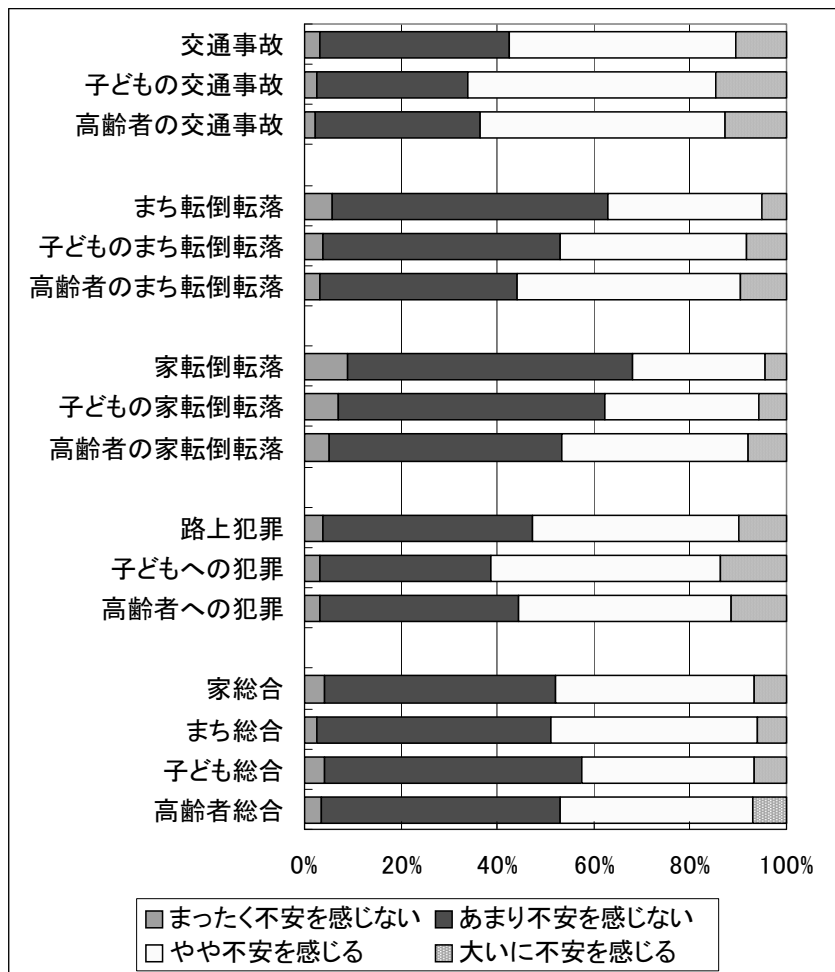


図 2-11 「子ども」「高齢者」に限定した場合の不安度 (Q7,Q8)

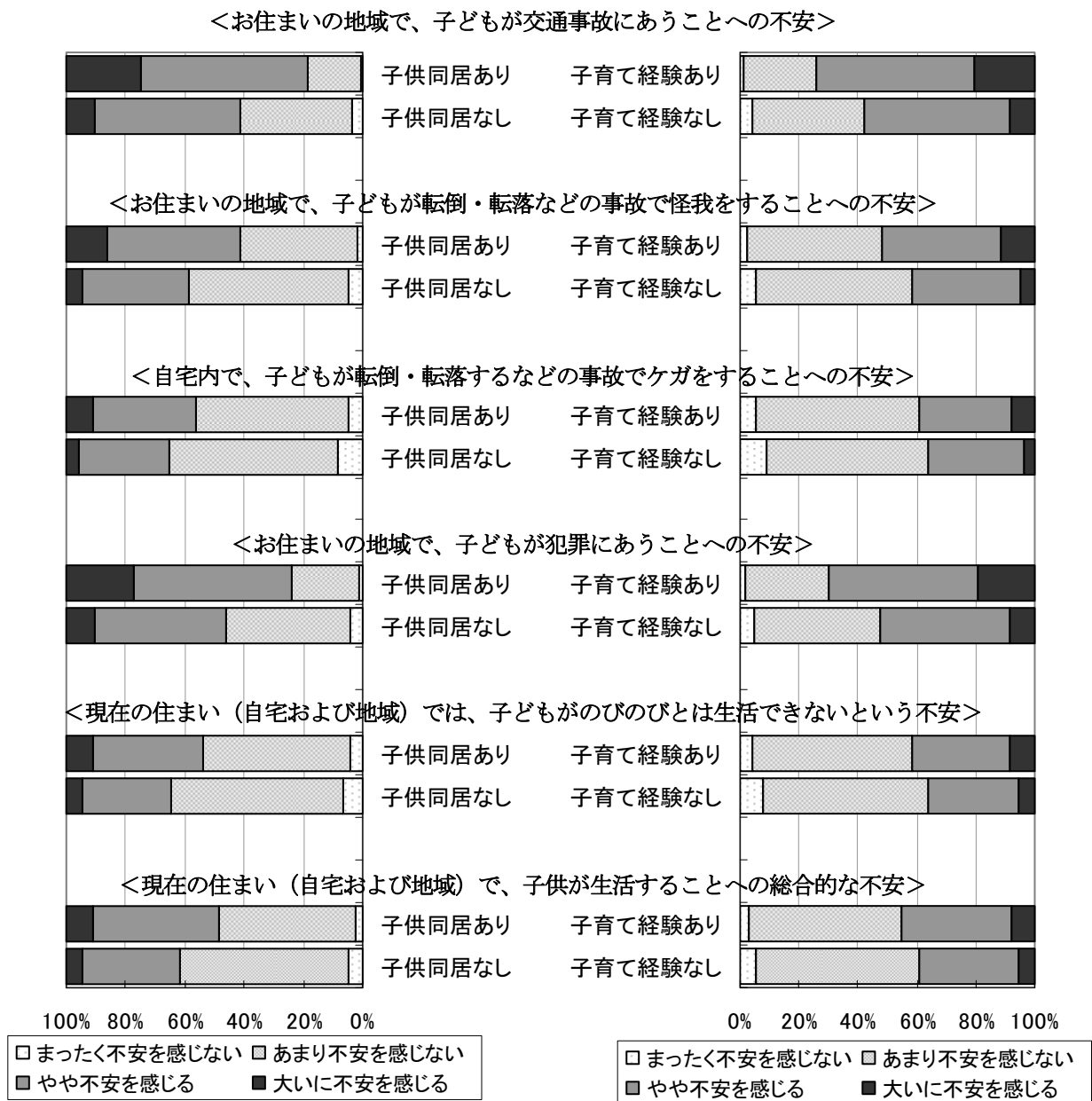


図2-12 「子ども」に限定した場合の不安度 × 子供と同居中、子育て経験あり

＜お住まいの地域で、高齢者が交通事故にあうことへの不安＞



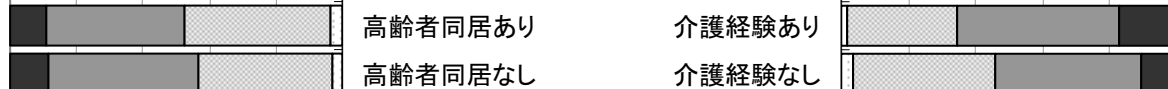
＜お住まいの地域で、高齢者が転倒・転落などの事故で怪我をすることへの不安＞



＜自宅内で、高齢者が転倒・転落するなどの事故でケガをすることへの不安＞



＜お住まいの地域で、高齢者が犯罪にあうことへの不安＞



＜現在の住まい（自宅および地域）では、高齢者がいきいきとは生活できないという不安＞



＜現在の住まい（自宅および地域）で、高齢者が生活することへの総合的な不安＞



100% 80% 60% 40% 20% 0%

□ まったく不安を感じない □ あまり不安を感じない
■ やや不安を感じる ■ 大いに不安を感じる

0% 20% 40% 60% 80% 100%

□ まったく不安を感じない □ あまり不安を感じない
■ やや不安を感じる ■ 大いに不安を感じる

図 2-13 「高齢者」に限定した場合の不安度 × 高齢者と同居中、介護経験あり

3) 危険-安全度

居住地域や自宅がどのくらい安全または危険だと思うかを聞いた。(個別は17項目、両側5段階、Q9 / 3項目はQ1)。

不安度の場合は片側4段階、今回は両側5段階であり、その違いはあるものの、不安度のランキングと大まかには同じ傾向であった。たとえば、以下の点があげられる。

- ◆ いずれの項目でも「どちらともいえない」が多く、「安全」「危険」の両極は少数派。
- ◆ 「風水害」「地盤災害」に「安全」側が多いという傾向。

不安度の傾向と異なるのは、主に以下の点である。

- ◆ 「車上ねらい等」「夜道」が地震や交通事故を抑えてもっとも危険だと考えられていること。主観的にそれほど不安ではないが、客観的には危険という判断と思われる(→2-21)参照)。
- ◆ 地震関係。もともとワーディングも異なるので、その影響も考えられる。(p.5参照)
- ◆ 火災関係と災害避難。不安ではあるが、頻度は低いと思われ、危険度が低くなっているのでは。

なお、「頼りになる(不安度では「近隣扶助」)」「救急医療」「近所づきあい良好(不安度では「近隣トラブル」)」は、危険-安全度(Q9)ではなく客観評価(Q1)なので、元々参考程度である(p.4参照)。不安度と傾向が違うのは、おそらくはこの関係であろう。

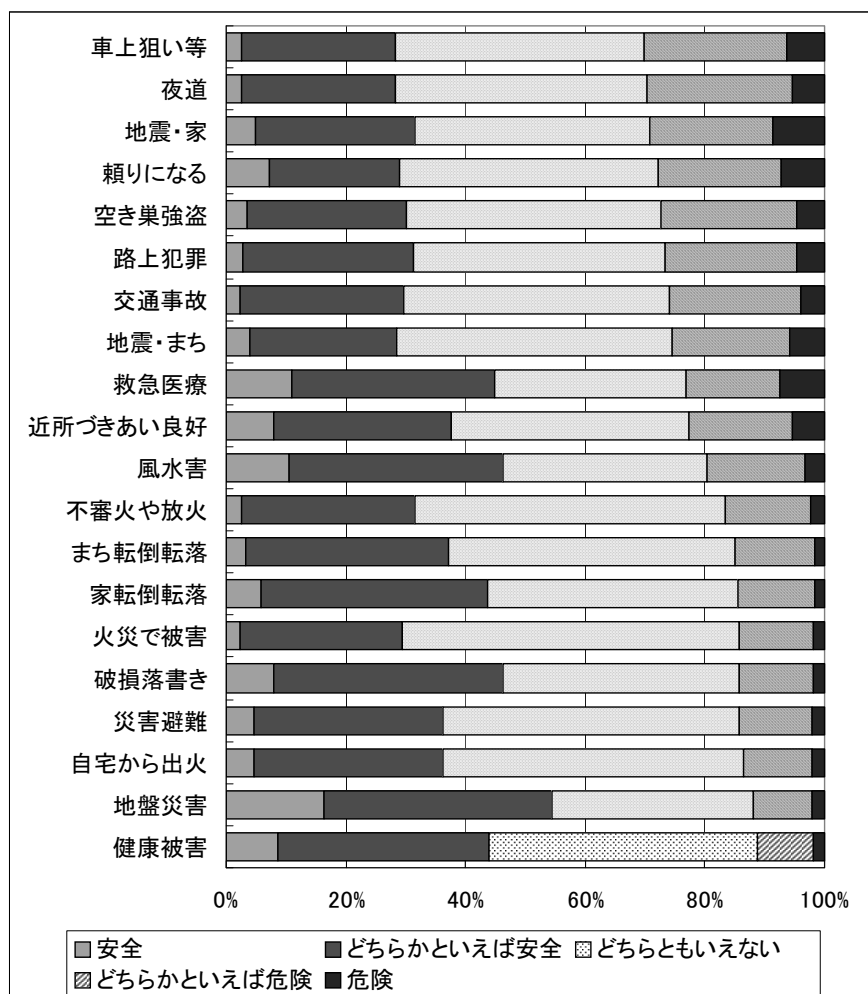


図2-14 安全-危険度 (Q9、一部はQ1)

不安度と同様、一部の項目を「小学生以下の子ども」「高齢者」に限定して聞いた (Q10)。

結果も不安度と同様に、限定することによって安全-危険度が高くなる傾向が見られた。しかしその様相は異なっており、限定することによって危険側が多くなるのは、「子ども」よりむしろ「高齢者」という結果であった。

- ◆ 「高齢者」に限定しても、不安度で不安の度合いが高くなる項目は「転倒転落」のみだったが、安全-危険度では「高齢者への犯罪」を除き、ほぼ危険側の認識が大きくなっている。
- ◆ 「子ども」に限定すると、不安度では全項目で不安の度合いが高くなったが、安全-危険度で、危険側が多くなる項目は「交通事故」だけである。
- ◆ 不安度でもっとも顕著だったのは「子どもへの犯罪」だが、安全-危険度ではまるでその傾向がない。また、全項目のうち、一番危険側の認識が高くなったのは「子ども」「高齢者」ともに「交通事故」だが、

これも不安度とは異なる結果である。

なお、子どもや高齢者と同居しているか否か等、関連する属性による安全-危険度の違いは、不安度同様に見られた。

- ◆ 不安度同様、現在、子どもと同居している人および子育て経験がある人は、地域に関する項目全てで危険側が多かった。ただし、自宅の転倒転落と総合判断 (子ども家総合) は、安全側が有意に多かった。
- ◆ 現在、65歳以上 (図中の高齢者) と同居している人では、「転倒転落」を除く全ての項目で、むしろ安全側の認識が多かった。しかし、介護経験がある人 (介護中を含む) ではまったく逆で、全ての項目で危険側が多いという結果である。
- ◆ 「高齢者」と年齢で一括りにするよりも、「介護が必要」等の属性で括った方が、分かりやすい結果となるようだ。

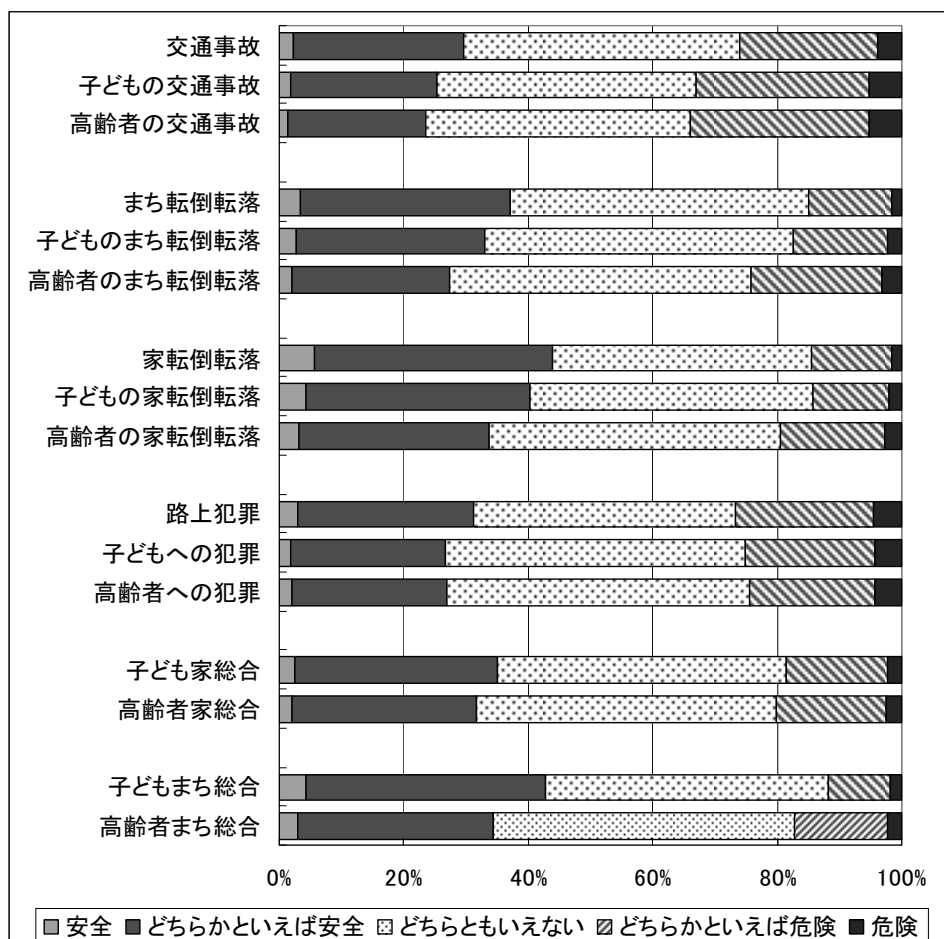


図 2-15 「子ども」「高齢者」に限定した場合の安全-危険度 (Q10)

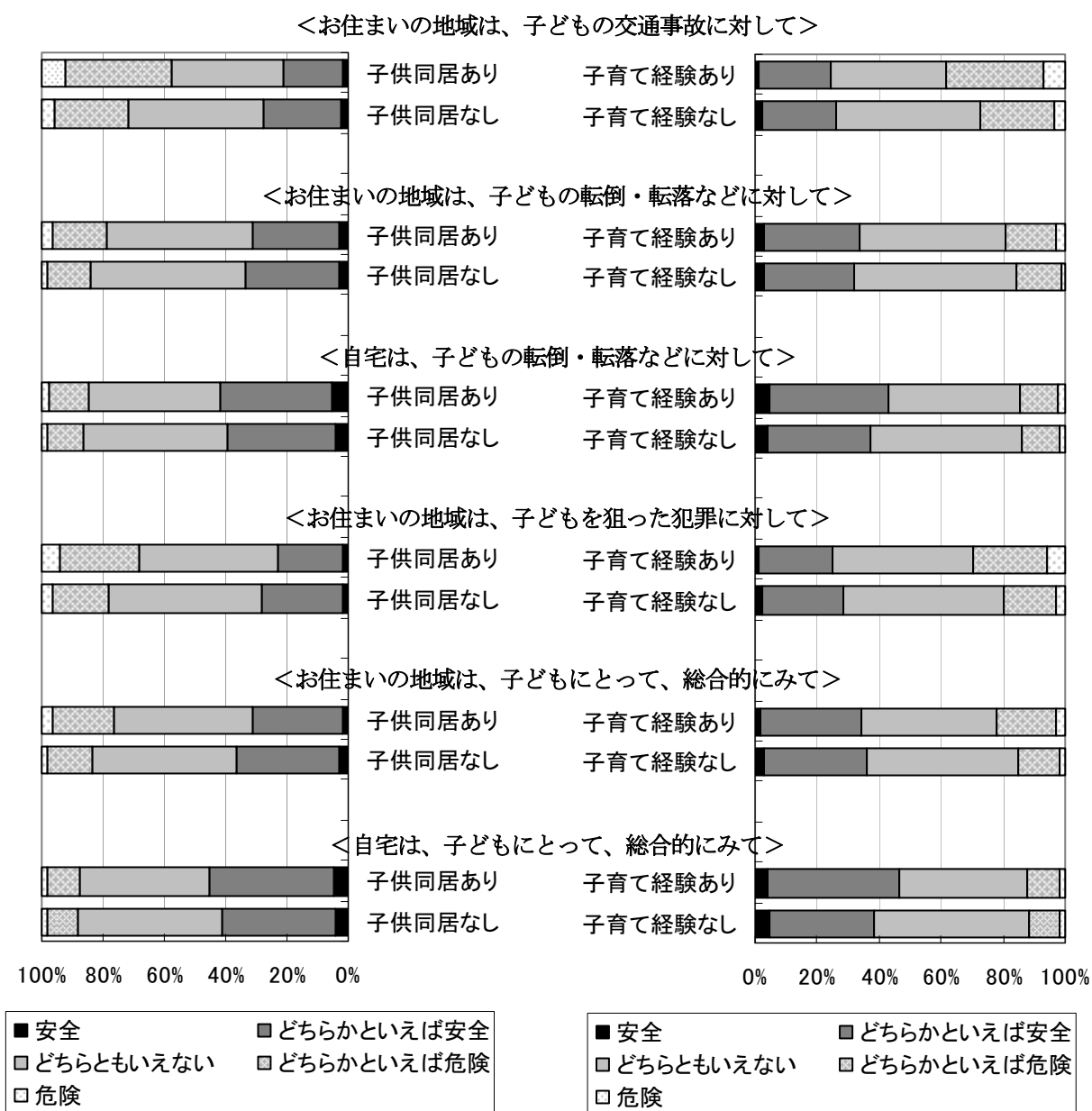


図2-16 「子ども」に限定した場合の安全-危険度 × 子供と同居中、子育て経験あり

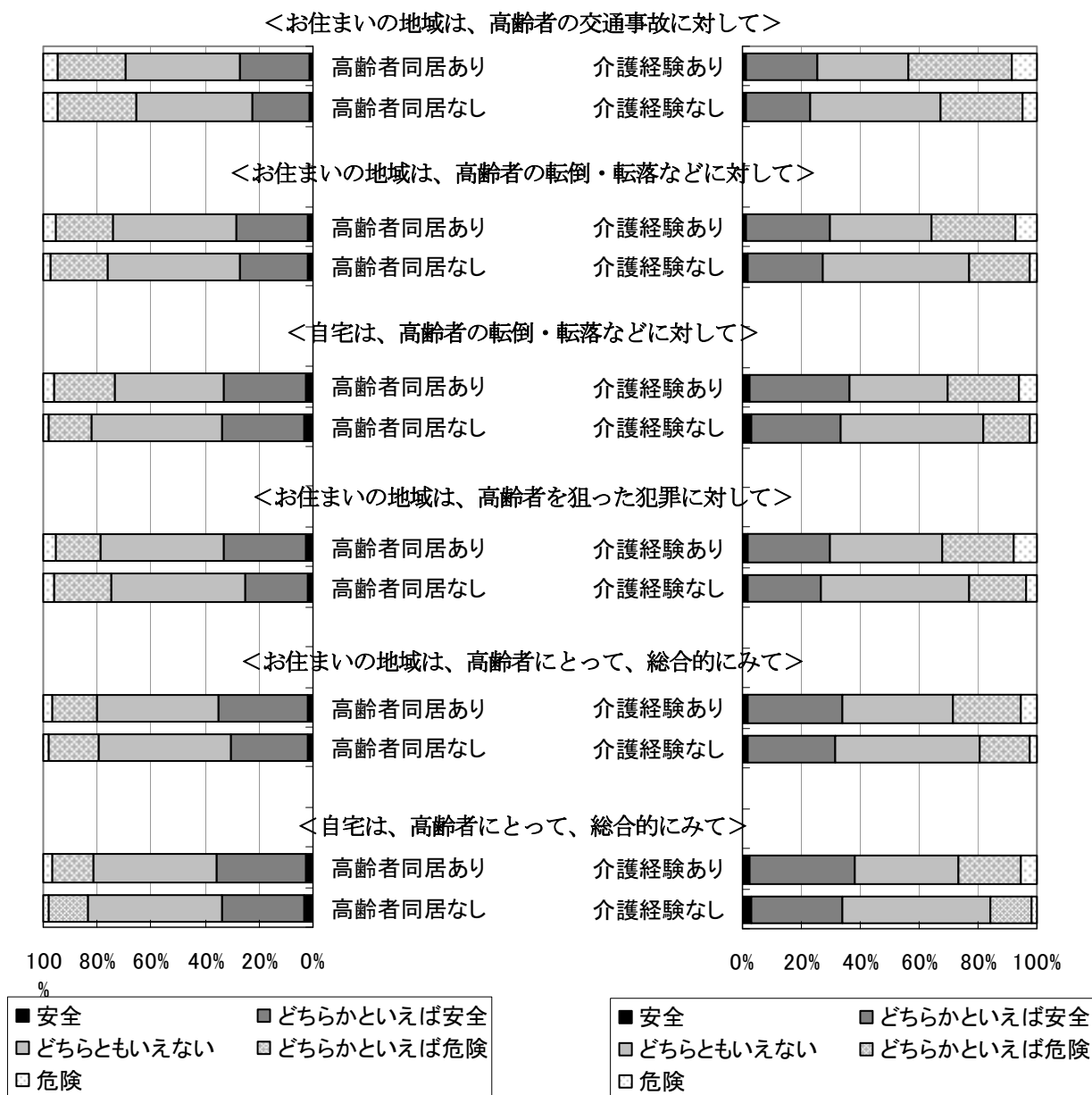


図2-17 「高齢者」に限定した場合の安全-危険度 × 高齢者と同居中、介護経験あり

4) 総合評価

居住地域と住居の各々について、「安全である」「安心できる」を含むさまざまな面に関する総合評価（両側5段階）を調べた（Q1,Q2の一部）。また、総合不満度、総合魅力度、総合関心度、総合不安度についても各4段階で聞いた（Q3～Q6）。

単純集計を比較すると、居住地域より住居で、「くつ

ろぎ」や「生活観」など、“主観度”の高い尺度が項目で「そう思う」度が高くなっているようである。

安全と安心は、当然のことながら、各々非常に相関が高い。

総合不安度と総合不満度も顕著に相関が高い。この2つと安全、安心の4者間の相関も非常に高い。もちろん、その他の総合評価間の相関も高い。

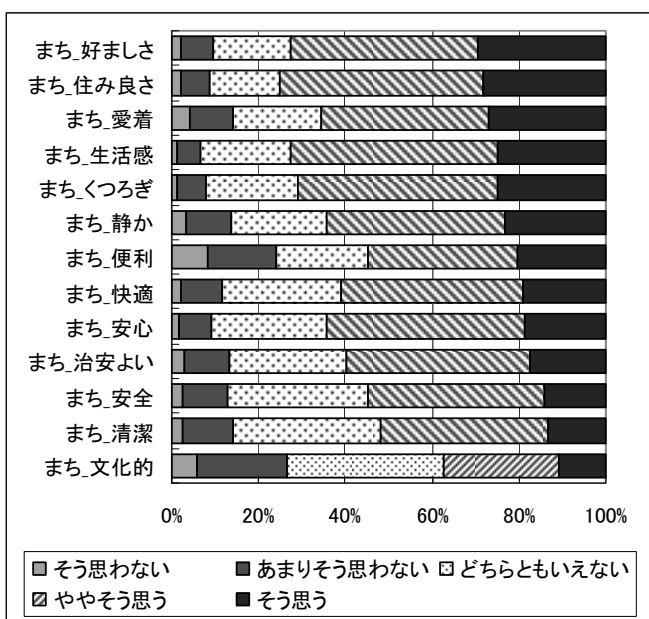


図 2-18 居住地域の総合評価

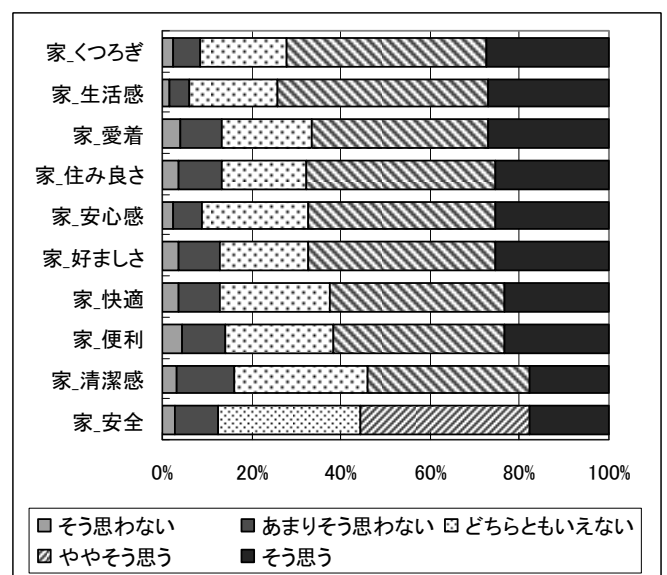


図 2-19 住居の総合評価

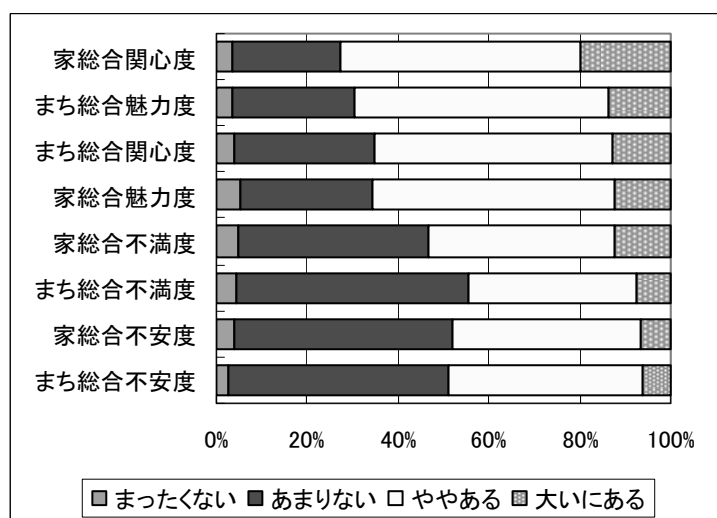


図 2-20 居住地域と自宅に関する総合評価 : 「関心度」「魅力度」「不満度」「不安度」

2-1-3. 「意見・態度・行動」

1) 参加意向・参加経験

安全、安心に関わる活動を含む、さまざまな地域活動への参加意向（Q20）と参加経験（Q18）を聞いた。

意向・経験率ともに高いのは「地域行事」だが、これはいわば当然である。この項目を除くと、もっとも

高いのは「清掃活動」、もっとも低いのは「バリアフリー点検活動」などになる。その活動の一般性、普及率などが影響していると考えられる。

なお、参加意向が高い人はほぼ全てに関して意向が高く、実際に参加した経験がある率が高かった。当然ながら、同じ項目の参加意向と参加経験は顕著に相関が高い。図2-22にその一例を示す。

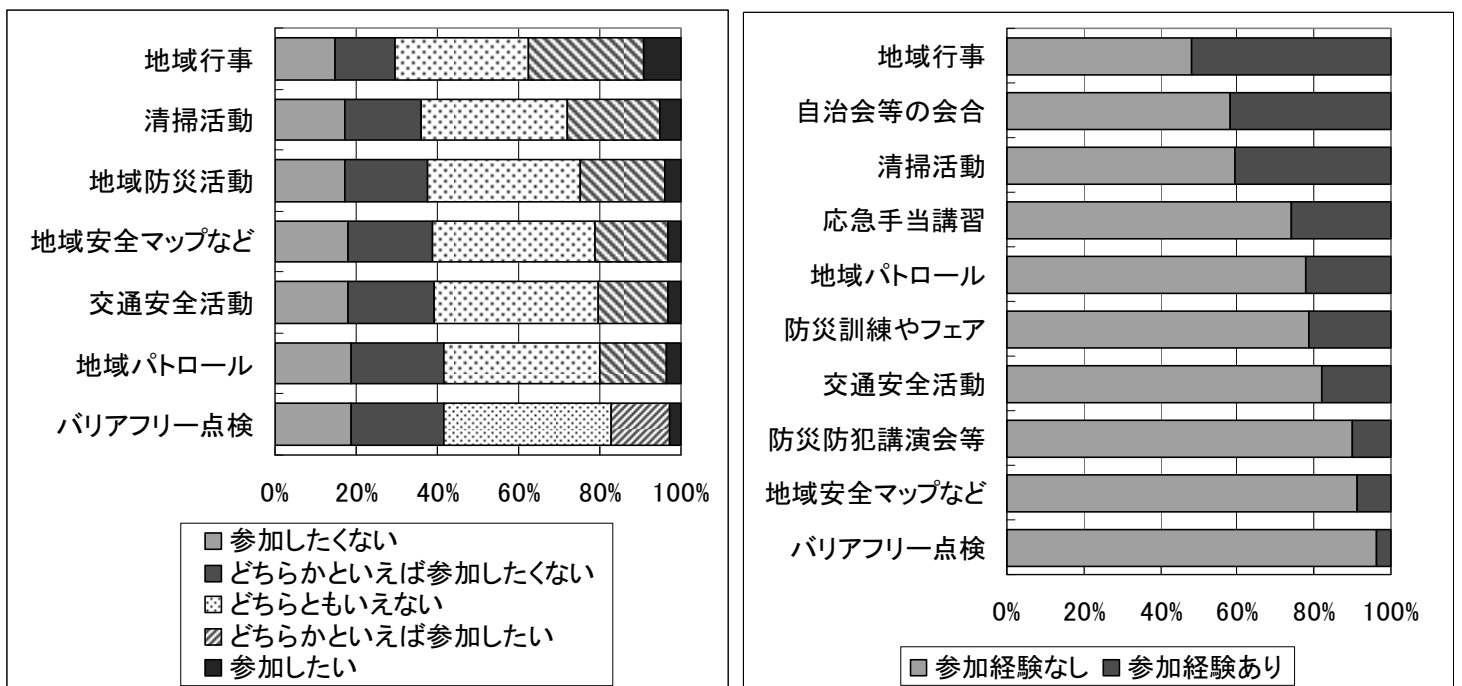


図2-21 地域活動

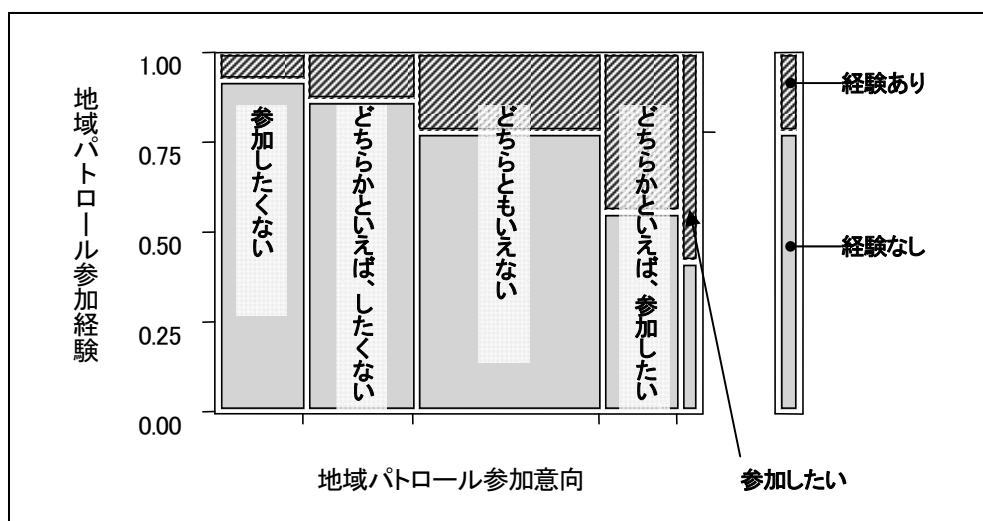


図2-22 参加意向と参加経験との関連：「地域パトロール」の例

既往の調査研究結果*と同様に、不安度が高い人で、参加意向が高い人は少数である。地域に対する評価が高く、むしろ安心・安全だと思っていて、関心度が高い人が、参加意向が高く、経験も高い。

* 若林直子ほか：「住民の防災意識に関する研究」日本建築学会大会梗概集 D-1 分冊，1997,1998,2000
 * 若林直子・小島隆矢「住民意識調査による防災意識の構造に関する研究」日本行動計量学会第 29 回大会発表論文抄録集，2001

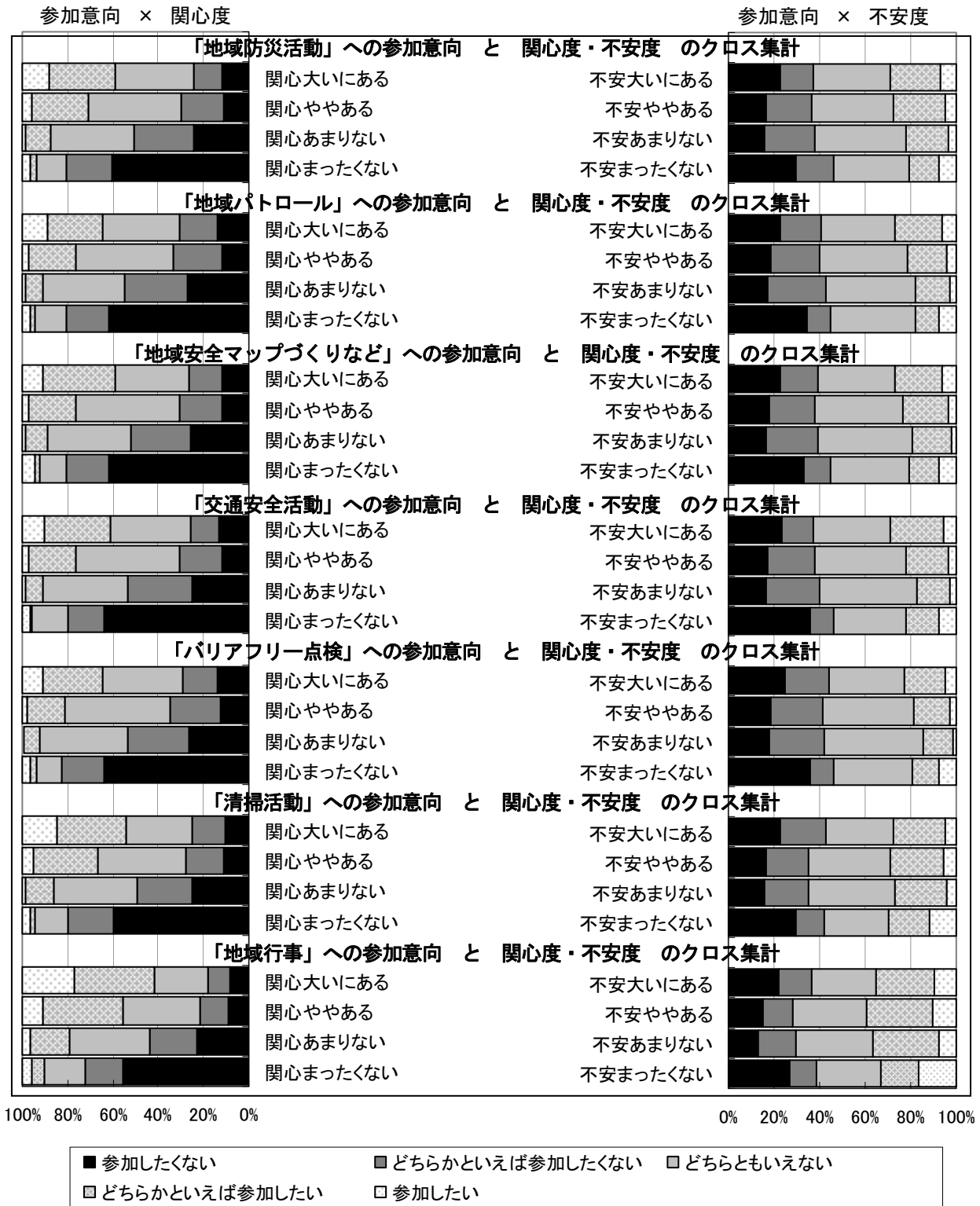


図 2-23 「参加意向」と「関心度」および「不安度」との関連

2) 交通安全や防犯への取組みに対する意見

交通安全や防犯への取組みについて、「効果があると思うか」などの意見を聞いた（Q20）。

各項目間の相関は高い。

たとえば、「子どもを見守る活動はよい」とする人は、「子どもは道路で遊ばせない」「ハンブなどの設置はよい」としている。また、「防犯カメラに効果がある」とする人は、オートロックにも、地域パトロールにも効果があるとする傾向がある。

他の設問と同様に、属性による差もある。子どもと同居している人では、当然、子ども関連の項目、ハンブなどの設置で「そう思う」率が高い。興味深いのは、子どもと同居している人は、子ども関連だけではなく、防犯カメラ等の効果、参加意向等、全てで「そう思う」率が若干高かったことである。

なお、防犯カメラ、オートロックは集合住宅の対策だが、集合住宅だと「効果あり」が増えるといった関連はなかった。

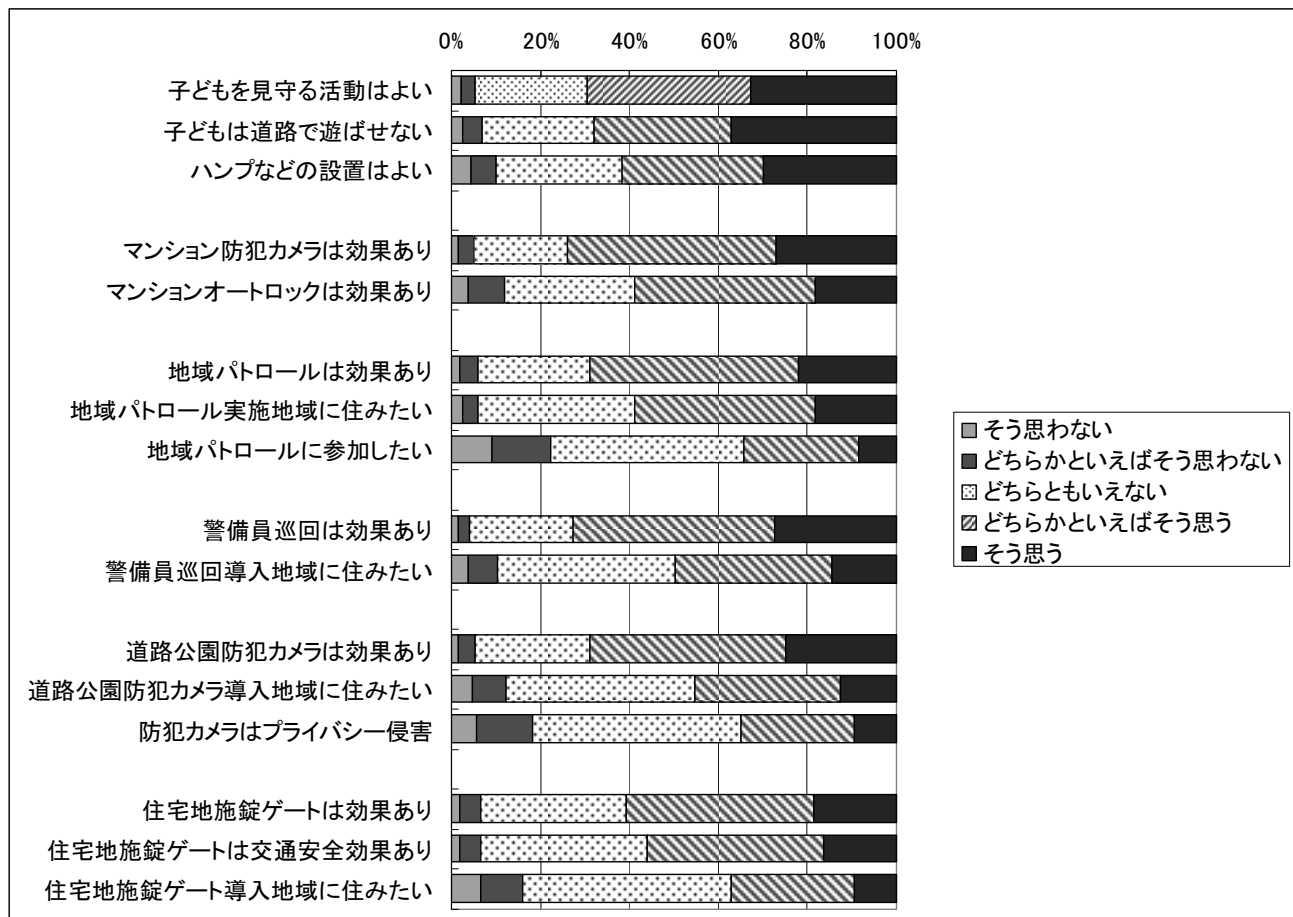


図2-24 交通安全や防犯への取組みに対する意見（Q20）

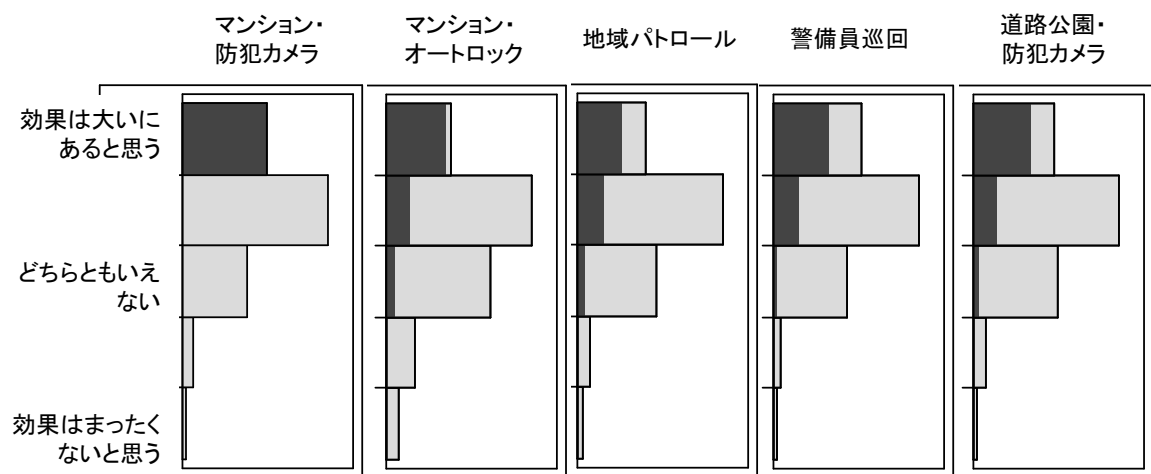


図2-25 各取組みの効果に対する意見
(濃い色は、マンションの防犯カメラは「大いに効果あり」とした人)

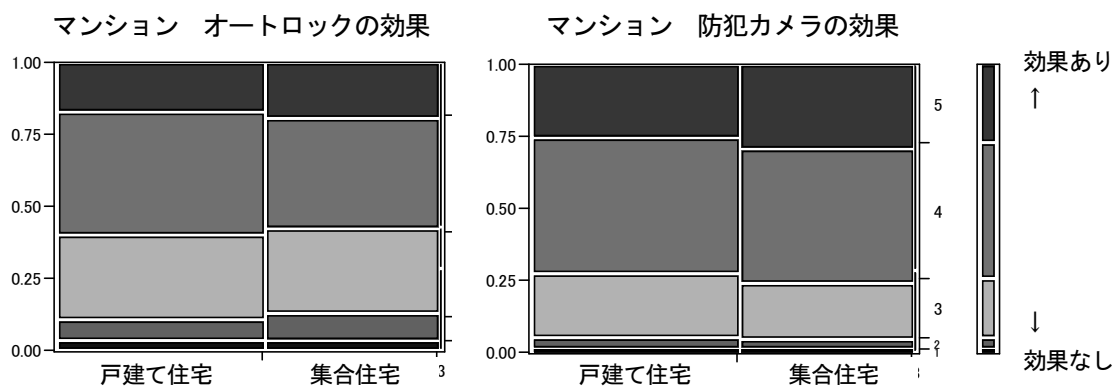


図2-26 住居形態別のオートロック・防犯カメラに関する意見

3) 防犯まちづくりに関する意見

雨宮らのまとめた「日本における防犯まちづくりへの批判論」の各論点*を質問項目にし、「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で聞いた (Q22)。

*雨宮護・横張真・渡辺貴史「日本における防犯まちづくりへの批判論の構造：1998年以降に現れた言説を対象に」都市計画報告集, 4・4, pp.124-131, 2006

賛成する人(防犯まちづくりを批判する人)が4割程度と少なくなかったのは、以下の項目である。

- ◆「防犯への市民の自己責任を強調され、富裕層しか防犯対策をできず、安全の格差が拡大する」 賛成側：40.2%
- ◆「ある地域で対策を講じて、犯罪が転移するだけで、犯罪の総数は減らない」 賛成側：37.4%

賛成する人が2割にも満たなかったのは以下である。

- ◆「防犯まちづくりは、快適性やプライバシーなどを損ない、全体として良い住環境を作ることにつながらない」 賛成側：18.1%

- ◆「防犯まちづくりは、特定の価値観に偏った、排他的な社会を生む」 賛成側：19.6%
- ◆「防犯まちづくりは、隔絶された住環境の形成を促し、外部との接触が分断される」 賛成側：19.9%

ただし、全般的にどの論点でも「どちらともいえない」が多い。とくに、以下の2つで顕著であり、反対側の意見が少ない(否定しにくい意見といえる)。

- ◆「防犯効果について根拠があいまいな対策が行われている」 中間：57.9%
- ◆「防犯まちづくりは対症療法であり、貧困・差別の解消、福祉の充実等の社会構造の改善のほうが重要だ」 中間：56.3%

このようななかでは「対策しても犯罪総数は減らない」では、比較的「どちらともいえない」が少なく、白黒はっきりしているといえる。

なお、フェイス項目と顕著な相関がある項目は見当たらなかった。

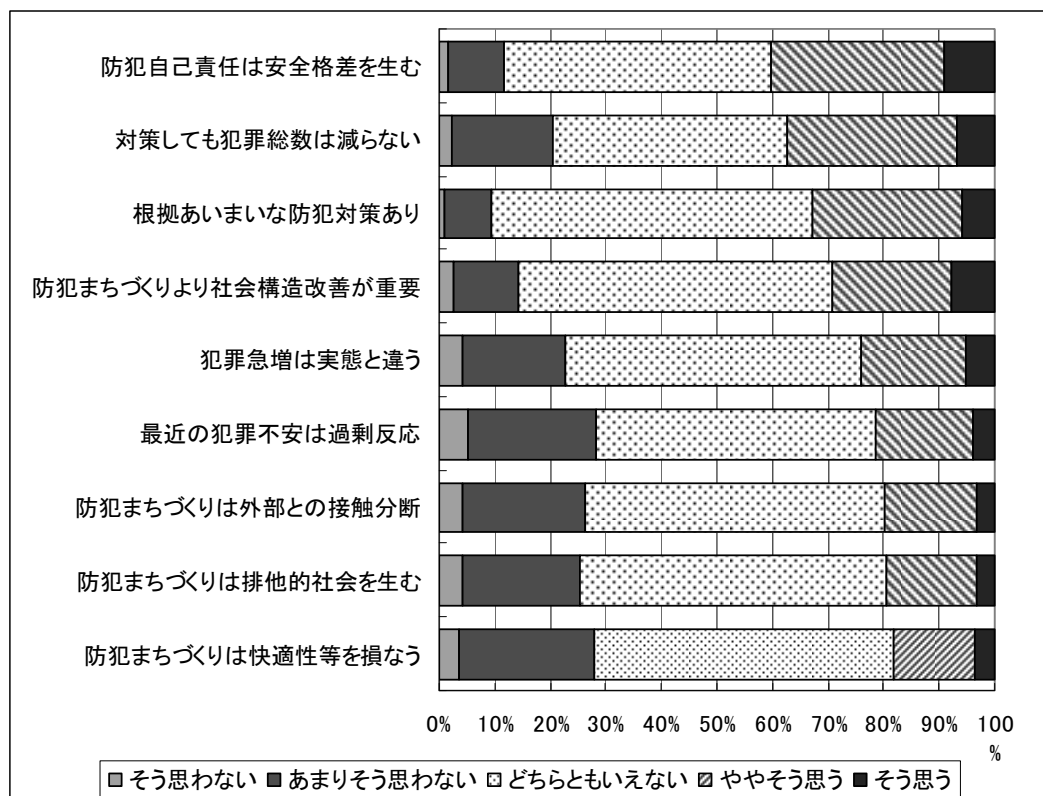


図2-27 交通安全や防犯への取組みに対する意見 (Q20)

4) 対策

安全に関する経験や知識の有無 (Q18)、日ごろの安全対策の実行の有無 (Q19) を聞いた。

最寄の交番の場所、災害時の避難所・避難場所に関しては、7割前後が「知っている」と回答しており、認知率が高いといえる。ただし、その知識が正確かはこのアンケートだけでは判断できない。とくに災害時の避難所・避難場所については誤答率も高いので、注意が必要である。

全般的に、既往の調査結果と比較して、安全に関する対策実行率は決して高いとはいえない結果である。

たとえば、近所との話し合いを伴う対策や、まだ一般的でない活動（地域安全チェック・マップづくり、地域バリアフリー点検など）の経験者は1割前後と非常に少ない。

家族で行う防災防犯対策の実行率（1人暮らしを除く 2,434 人が回答）も、高いとはいえない。話し合ったことがある人は過半数だが、災害時の家族での連絡方法や集合場所を決めた人は約3割と少ない。

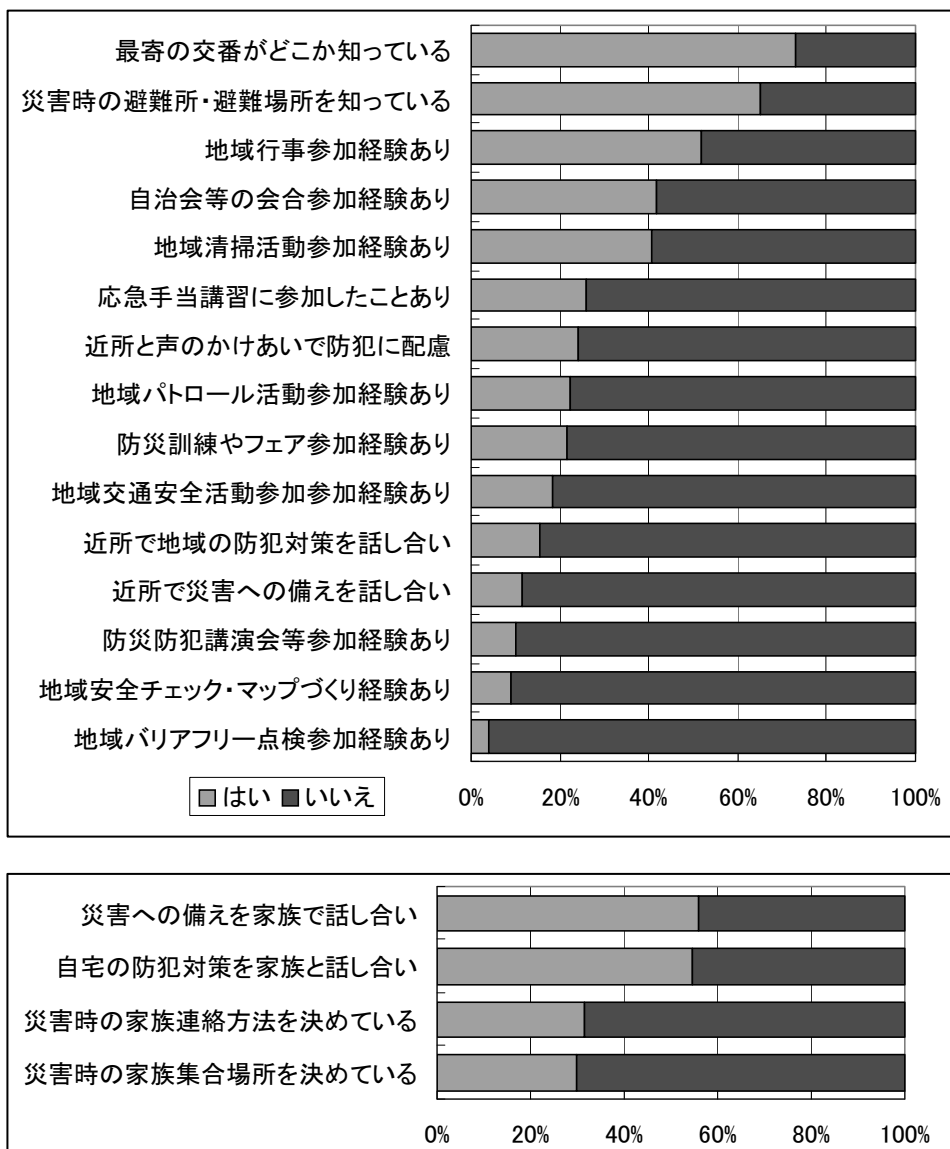


図 2-28 安全に関する経験、知識 (Q18)

日ごろの安全対策実行率も、過半数を超える人が実行している対策はわずかであった。

なお、対策実行率が高い人は、地域や自宅に愛着や関心があり、地域に対して安心、安全等、肯定的な評価をしている人が多いという傾向があった。

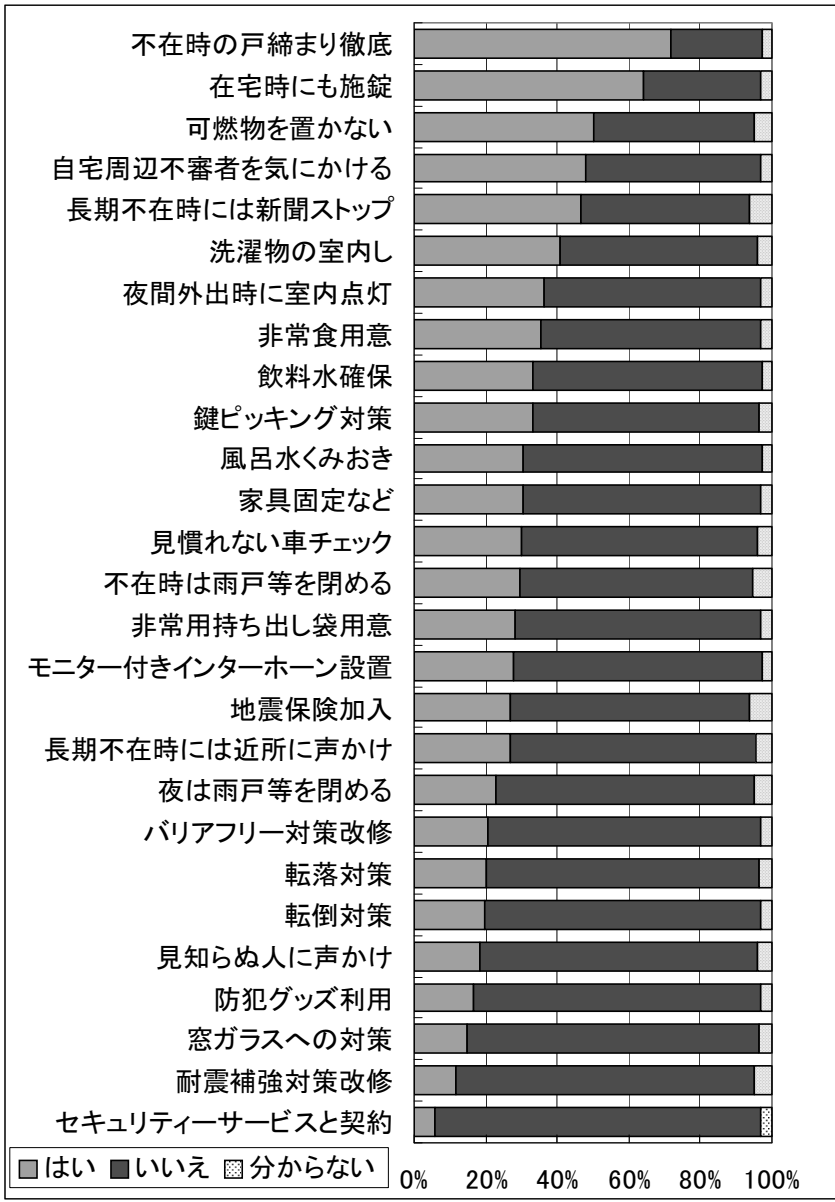


図2-29 日ごろの安全対策 (Q19)

2-2. 「不安」「安心」「安全-危険」の違いに関する検討

2-2-1. 「不安度」と「安全-危険度」

1) 「不安」は主観、「安全-危険」は客観評価

「不安度」と「安全-危険度」の違いは、「車上ねらい等（自家用車やオートバイを狙った犯罪、自動車盗・車上ねらいなど）」の不安度と安全-危険度の差に端的に現れている。

自家用車もオートバイもない人（11.7%、294人）は、ある人に比べて不安度は有意に低いですが、安全-危険度はまったく変わらないのである。さらに自転車も所有していない人（83人）の不安度はさらに若干低いですが、安全-危険度評価はやはり変わらない。持っていないので被害の不安はないとしながらも、「地域は客観的に危険」とした人が少なくないと解釈できる。

また、現在所有している人の方が、その被害に遭った経験があり、最近「車上ねらいなど」が多いと感じているという傾向もみえる。

しかし、車もバイクも自転車さえもなくとも「不安」を感じている人が半数近くもいる。「客観評価と主観評価の違い」と言い切るほど、話は単純ではなさそうである。

たとえば、すでにみてきたように、「小学生以下の子ども」に限定すると個別の「不安度」は高くなるが、個別の「危険度」および総合不安度等はほぼ変わらない。この傾向は、子育て経験者（進行形を含む）で顕著である。しかし、「65歳以上の高齢者」に限定しても「転倒転落」以外の不安度は変わらない。一方で危険度は高くなる傾向がある。

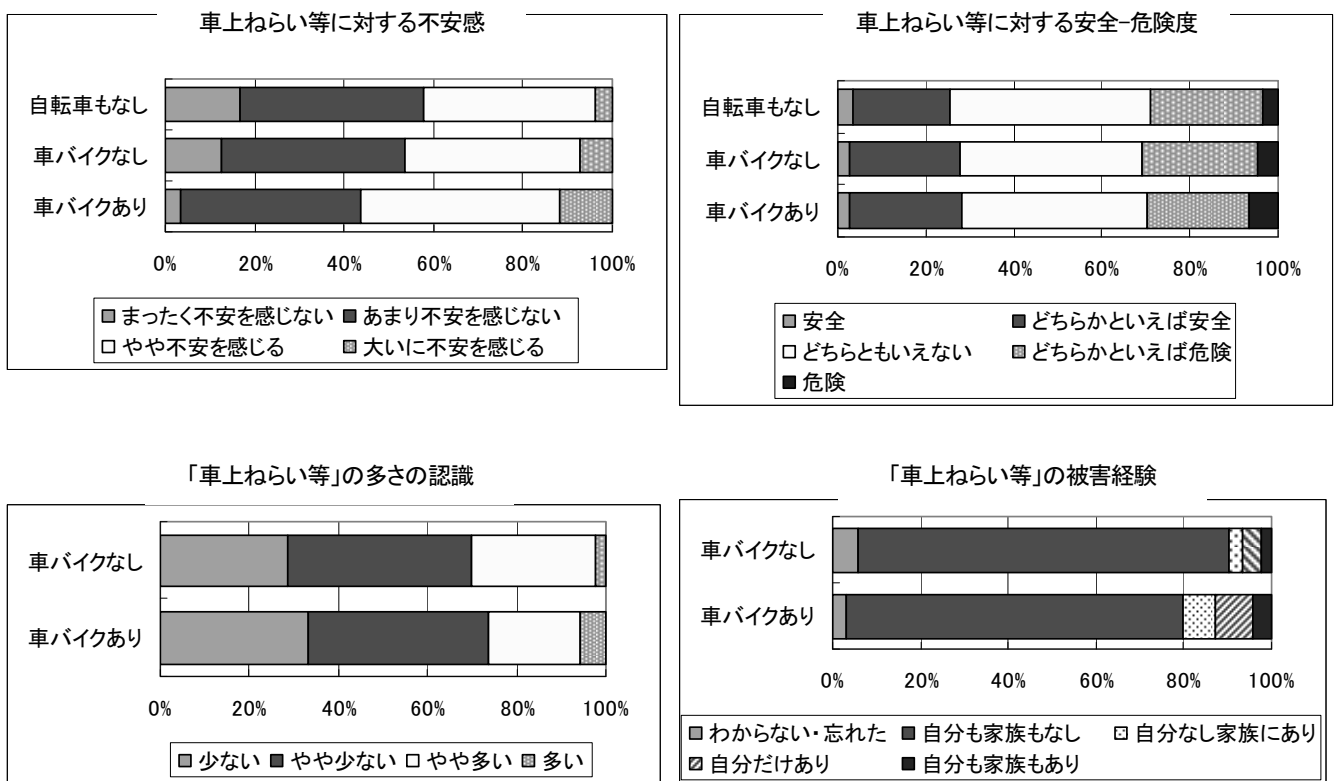


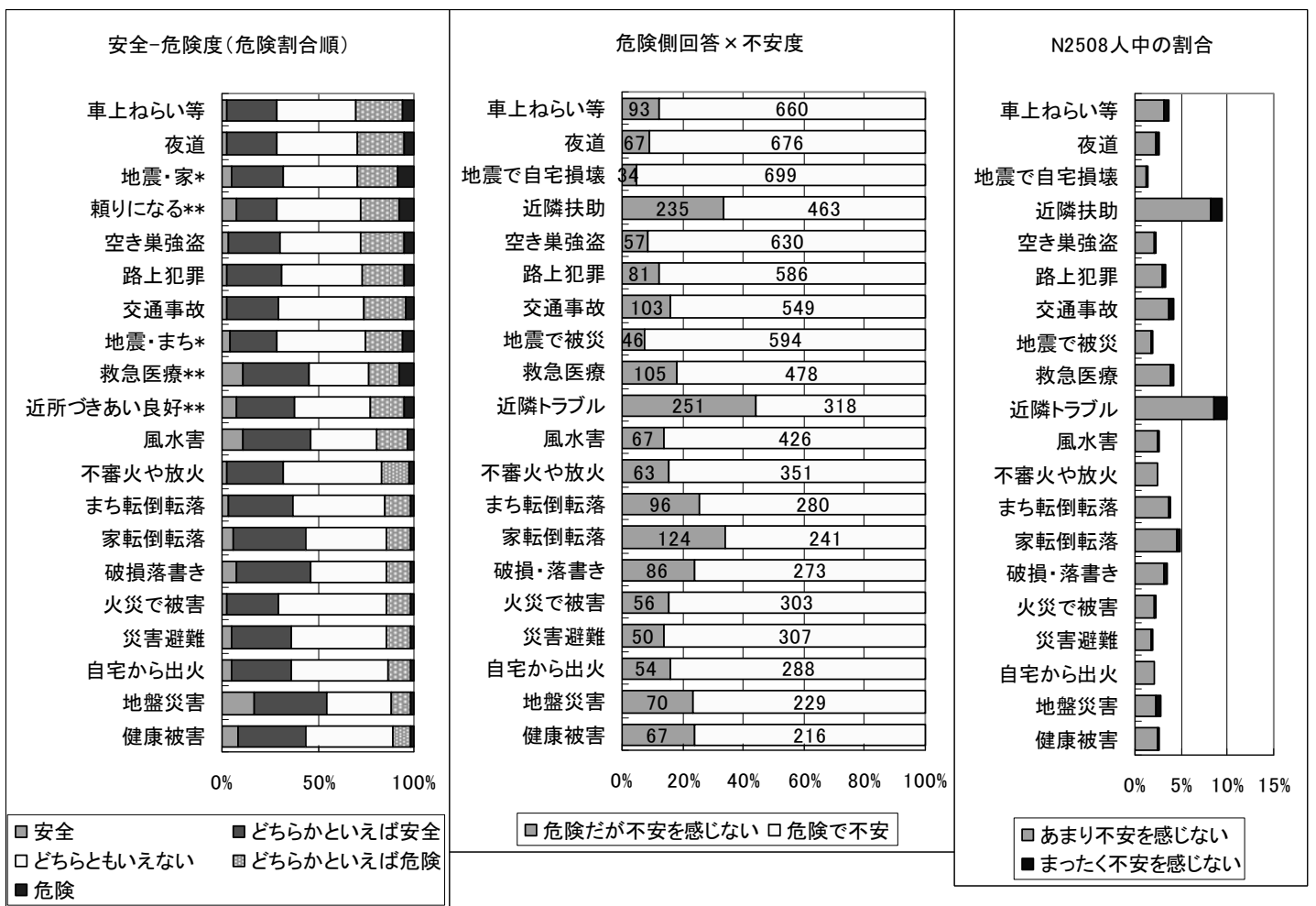
図2-30 「車上ねらい等」に対する不安感、安全-危険度、多さの認識、被害経験

2) 「危険」なのに「不安を感じない」、 「安全」なのに「不安」

項目によって、不安度と安全-危険度の割合は異なるのかをみるために、「危険」なのに「不安を感じない」（危険側回答×不安度）、および、「安全」なのに「不安を感じる」（安全側回答×不安度）のグラフを作成した（図2-31、32）。

「危険」なのに「不安を感じない」のは、近隣トラブル（近所づきあいが良好ではないが、近隣トラブルの不安は感じない）、近隣扶助（いざというとき頼りになる人が多い地域ではないが、助け合える人が近所にいないという不安は感じない）、自宅内の転倒転落、車上ねらい等が多い。

そういう可能性は客観的にはある、そういう環境ではあるが自分には関係がない、または、そうなったところでそれほど深刻ではない、と思える項目と考えられる。



* : 「不安度」とはワーディングを若干変えた項目
 ** : 「不安度」とは設問自体を変えた項目 (p.4 参照)

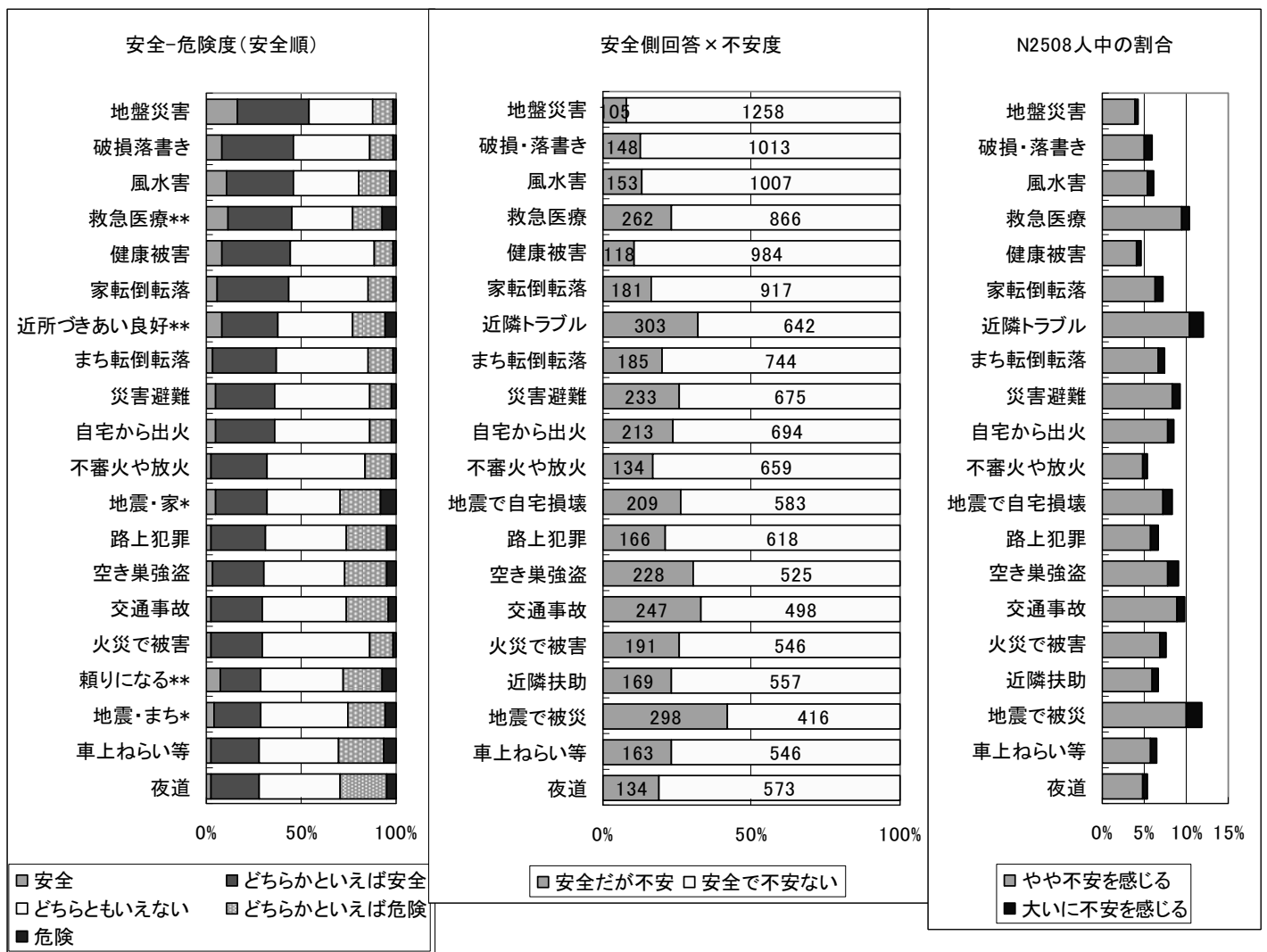
図2-31 項目別、「危険」なのに「不安を感じない」割合（危険側回答×不安度）

「安全」なのに「不安を感じる」のは、救急医療（急病やケガ、夜間の診療に対応する病院や体制が整ってはいるが、いざというときの不安はある）、近隣トラブル（近所づきあいが良好な地域だが、近所づきあいなどで不快なトラブルにまきこまれることへの不安はある）、地震で被災（地震に対し安全な地域ではあるが、大きな地震で被災することへの不安はある）、交通事故等が多い。

そうなる可能性は客観的には（環境的には）低いものの、可能性はゼロではないし、そうなった場合の深刻度、または心理的ダメージが大きい、と思える項目と考えられる。

「近隣トラブル」については、「危険」なのに「不安を感じない」人も、「安全」なのに「不安を感じる」人も多い。ワーディングの影響もあろうが、以下の両方も自然な意見とも見える。近所づきあいの実態や考え方の違いによる影響もあろう。

- ◆ 近所づきあいが良好ではないが、近隣トラブルの不安は感じない
- ◆ 近所づきあいが良好な地域だが、近所づきあいなどで不快なトラブルにまきこまれることへの不安はある



* : 「不安度」とはワーディングを若干変えた項目
 ** : 「不安度」とは設問自体を変えた項目 (p. 4 参照)

図 2-32 項目別、「安全」なのに「不安を感じる」割合 (安全側回答×不安度)

図2-33は、「子ども」「高齢者」に限定した場合の、「危険」なのに「不安を感じない」、「安全」なのに「不安」をグラフ化したものである。

これまで見てきたように、限定した場合の方がしない場合よりも不安度が高い。これを反映して、「危険」なのに「不安を感じない」割合は、限定しない場合よりもずっと少ない。

とくに「子ども」で不安感が大きい（安全でも不安等）。とくに交通事故や犯罪など、起こってしまったら取り返しがつかないことになるかもしれない項目が「安全でも不安を感じる」の上位で、転倒転落などの日常事故よりも不安感が高いようだ。

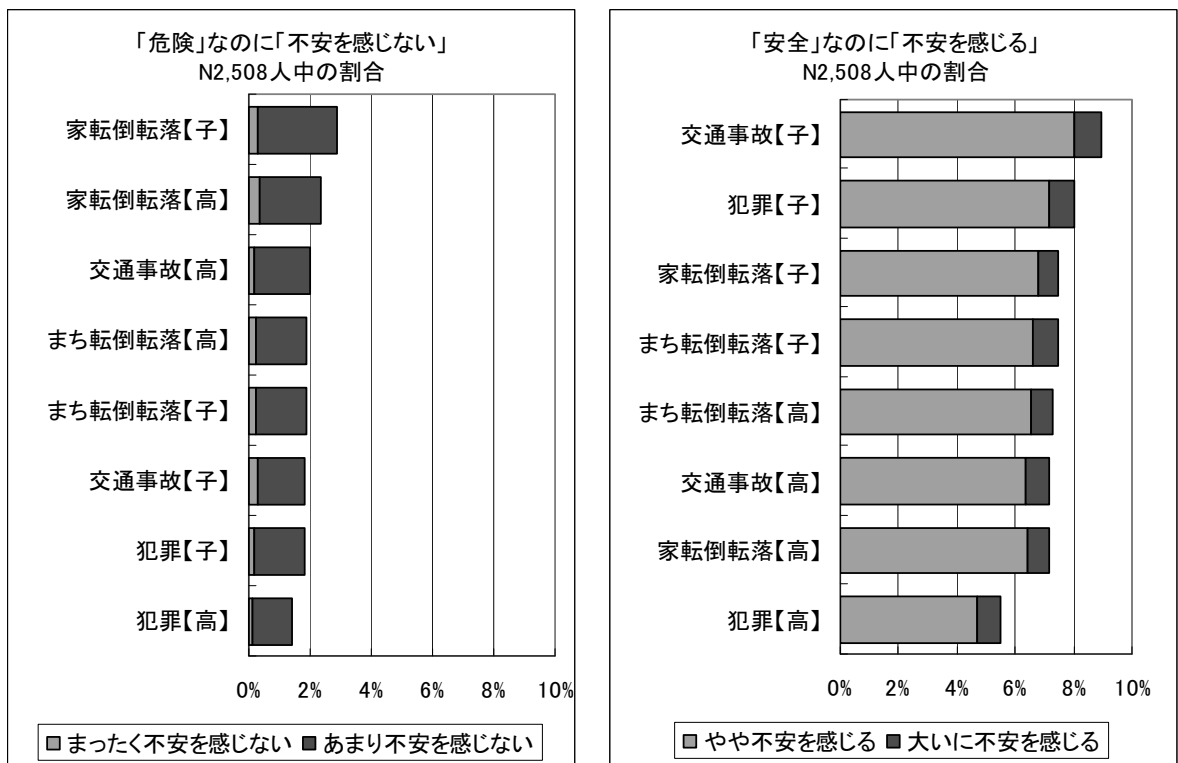


図2-33 子どもまたは高齢者に限定した場合
「危険」なのに「不安を感じない」割合（危険側回答×不安度）
「安全」なのに「不安を感じる」割合（安全側回答×不安度）

2-2-2. 「不安」「安心」「安全」に関する分析

～地域の「不安度」「安心度」「安全度」に関する対応分析結果の比較～

1) 分析方針

これまで検討してきた個別の「不安度」「危険-安全度」とは別に、居住地域および自宅に関する総合的な不安度、安心度、安全度をそれぞれ聞いている。過去の調査結果等からは以下のような違いが推測され、その検討もできるようにと、別々に調査項目に入れたという経緯である。

- ◆ 「危険」の反対は「安全」だが、「不安」の反対が「安心」というわけではない。
- ◆ 「安心」は、「安全」に比べて総合評価に近い。
- ◆ 「安全」は、衛生・快適といった価値観に近い。

該当する調査項目は、以下のとおりである。

- ◆ お住まいの地域は、安全である
→ そう思う-思わない 5段階 (Q1)
- ◆ お住まいの地域は、安心できる
→ そう思う-思わない 5段階 (Q1)
- ◆ ご自宅は、安全である
→ そう思う-思わない 5段階 (Q2)
- ◆ ご自宅は、安心できる
→ そう思う-思わない 5段階 (Q2)
- ◆ お住まいの地域には、不安が
→ 大いにある-まったくない 4段階 (Q6)
- ◆ ご自宅には、不安が
→ 大いにある-まったくない 4段階 (Q6)

分析は地域と自宅で別々に行う必要があるが、今回は地域のみで行った。

具体的には、上記の不安度、安心度、安全度の各々と、それ以外の総合評価（住みよい、愛着がある、魅力度等）と個別評価（自然に親しめる、よい人が多い、治安がよい等）の対応分析を行い、3者の結果を比較するという方法にした。

なお、分析にあたり、不安度、安心度、安全度以外の評価項目は、4段階または5段階尺度のところ、0-1の2段階に情報を圧縮した。たとえば「総合魅力度（4段階）」は「大いにある」「ややある」を1、それ以外を0に、「くつろげる（5段階）」は「そう思う」「ややそう思う」のみを1、それ以外を0にしている。

また、関連がありそうなフェイス項目も0-1データにして加えた。以下である。

- ◆ 性別、年齢（5歳階級）
- ◆ 世帯属性（単身、夫婦、親子、二世帯以上）
- ◆ 子ども同居、高齢者同居
- ◆ 居住地域タイプ（都会、田舎、郊外）
- ◆ 地域居住5年未満、自宅築年数20年以上
- ◆ 戸建て/集合、持ち家/賃貸、木造/コンクリ造

2) 「総合不安度」 × 「個別評価など」の対応分析

まず、「総合不安度（片側 4 段階）」と以下の項目とのクロス集計に基づき、対応分析を行った。

- ◆ 不安度・安心度・安全度以外の総合評価（住みよ
い、愛着がある、魅力度等）
- ◆ 個別評価（自然に親しめる、よい人が多い、治安
がよい等）
- ◆ フェイス項目（性別、年齢、世帯属性など）

分析の過程で、「総合不安度」と非常に相関が高い「総合不満」が外れ値となったので削除した。

結果の二次元布置図を図 2-34 に示す。

結果はほぼ一次元だったので（ $c1=84.3\%$ ）、各項目を見やすくするため、第一軸の対応分析スコア（C1）順に個別評価・フェイス項目等を並べ替え、地域の総合不安度とのクロス集計結果を帯グラフにして示した（図 2-35）。

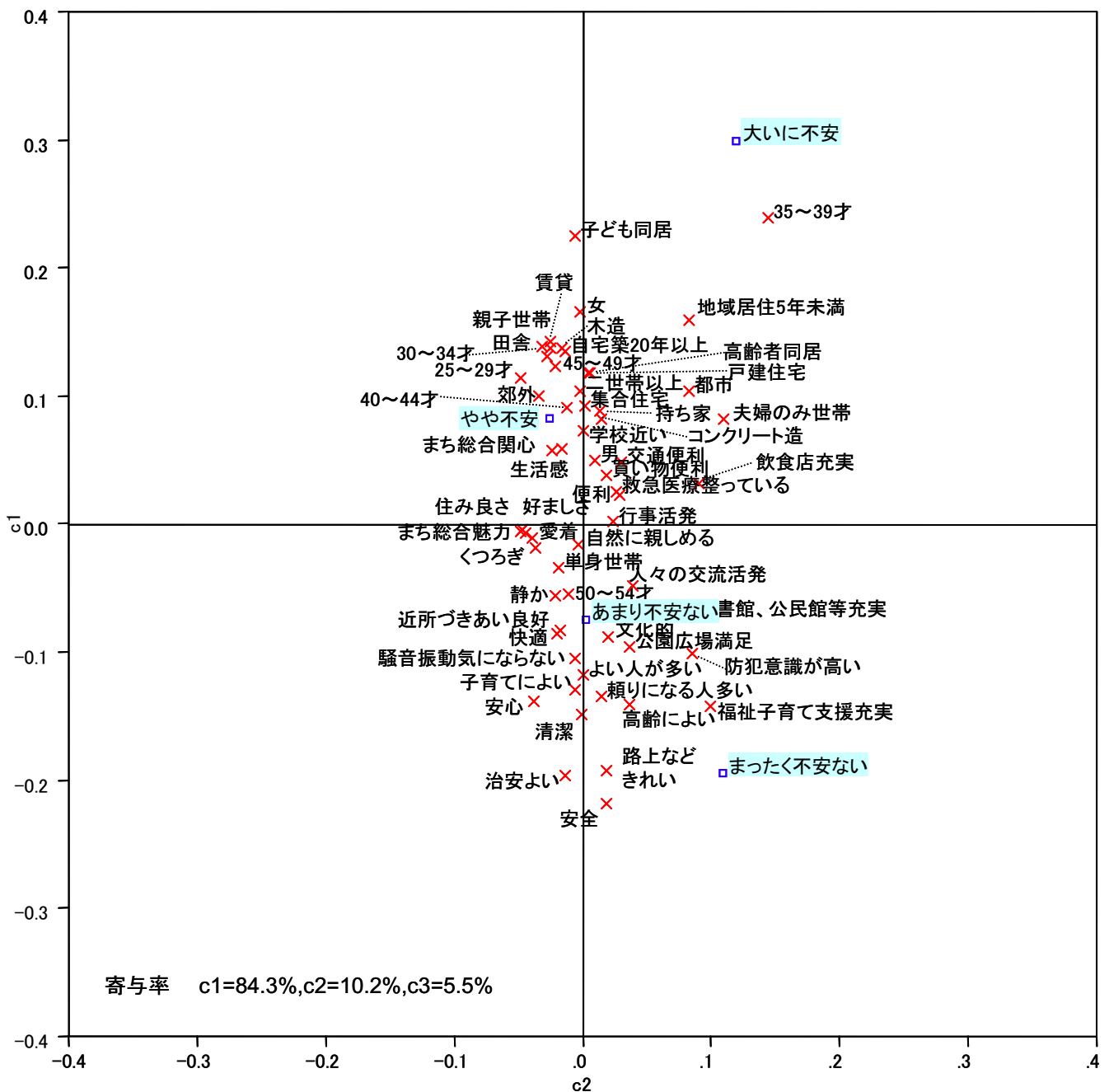


図 2-34 「総合不安度」 × 「個別評価など」の対応分析結果

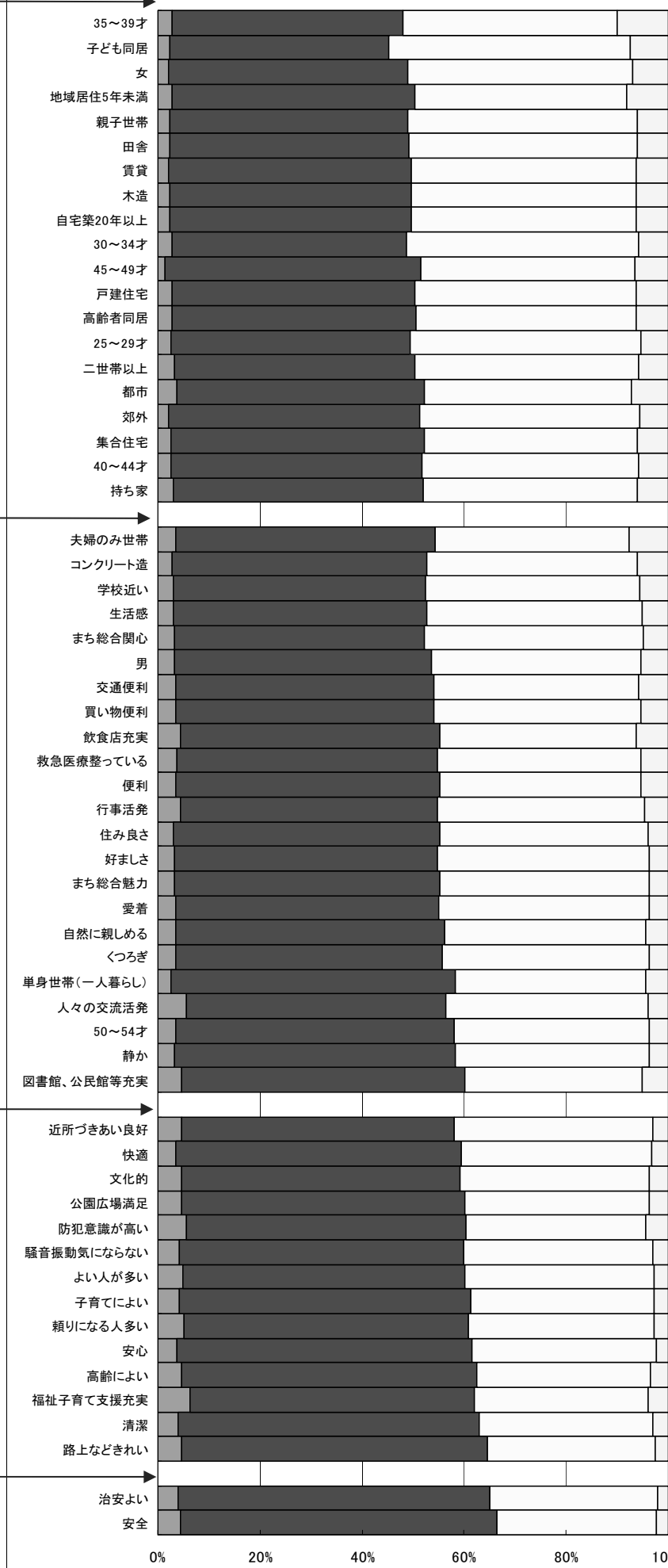
大いに不安

地域 総合不安度×個別評価・フェイス項目など

やや不安

あまり不安ない

まったく不安ない



■ まったく不安ない
 ■ あまり不安ない
 □ やや不安
 □ 大いに不安

図2-35 「総合不安度」×「個別評価など」のクロス集計結果 (対応分析スコア順)

帯グラフはそれほどクリアではなかった。「大いに不安」側の項目にも「あまり不安ではない」が一定以上あり、「まったく不安がない」側にも「やや不安」が少なくない。

ただ、両極に関しては大体次のような解釈をすることができる。

- ◆ 「不安がある」のは、
 - ・とくに 30 歳代後半で、子ども同居世帯（とくに女性）。
 - ・居住年数が浅く、どちらかといえば「田舎」に住んでいることが多い。
 - ・賃貸や、木造、築年数が古い建物に住んでいることが多い。
- ◆ 「不安がない」のは、
 - ・1人暮らし、または 50 歳代。
 - ・防犯意識が高く、よい人、頼りになる人も少なくない地域と認識している。
 - ・清潔で、治安がよく、安全な地域と認識している。
- ◆ 両極に振り分けられないのは、
 - ・好ましさ、住みよさ、総合魅力度などの総合評価
 - ・利便性に関する評価

3) 地域の「総合安心度」×「個別評価など」の対応分析

地域の「総合安心度（両側5段階）」と以下の項目とのクロス集計に基づき、対応分析を行った。

- ◆ 不安度・安心度・安全度以外の総合評価（住みよ
い、愛着がある、魅力度等）
- ◆ 個別評価（自然に親しめる、よい人が多い、治安
がよい等）
- ◆ フェイス項目（性別、年齢、世帯属性など）

結果の二次元布置図を図2-36に示す。

結果はほぼ一次元だったので（ $c1=93.6\%$ ）、不安度と同様、第一軸の対応分析スコア（C1）順に個別評価・フェイス項目等を並べ替え、地域の総合不安度とのクロス集計結果を帯グラフにして示した（図2-37）。

なお、「まち総合不満」「まち総合不安」は外れているようにも見えるが、カットしても他の項目の布置等がほぼ変わらないので、このまま採用とした。

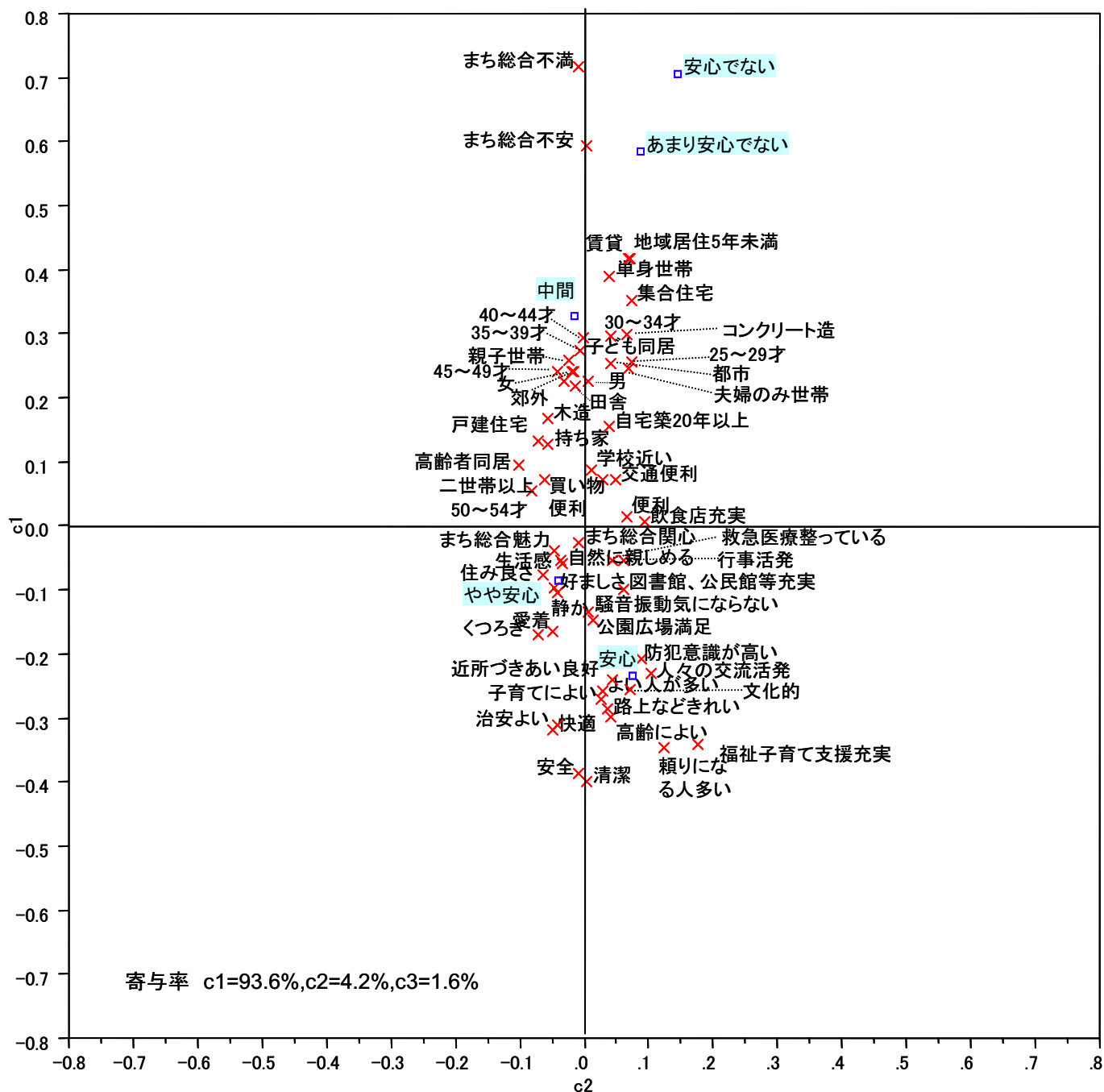


図2-36 「総合安心度」×「個別評価など」の対応分析結果

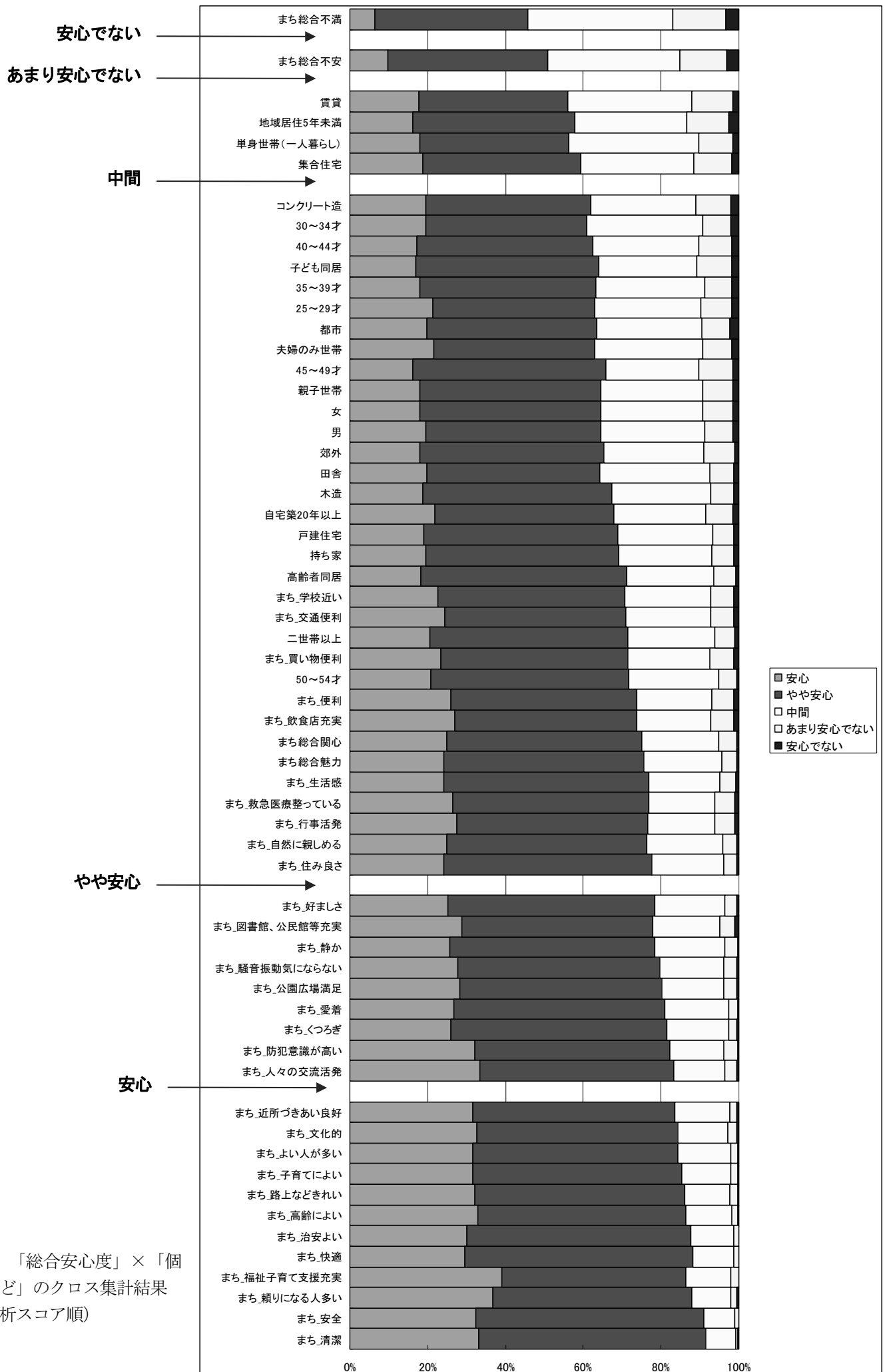


図 2-37 「総合安心度」×「個別評価など」のクロス集計結果
(対応分析スコア順)

4) 地域の「総合安全度」×「個別評価など」の対応分析

地域の「総合安全度（両側5段階）」と以下の項目とのクロス集計に基づき、対応分析を行った。

- ◆ 不安度・安心度・安全度以外の総合評価（住みよ
い、愛着がある、魅力度等）
- ◆ 個別評価（自然に親しめる、よい人が多い、治安
がよい等）
- ◆ フェイス項目（性別、年齢、世帯属性など）

結果の二次元布置図を図2-38に示す。

結果はほぼ一次元だったので（ $c1=91.2\%$ ）、これまで同様、第一軸の対応分析スコア（C1）順に個別評価・フェイス項目等を並べ替え、地域の総合不安度とのクロス集計結果を帯グラフにして示した（図2-39）。

なお、「まち総合不満」「まち総合不安」「治安はよい」はカットしても他の項目の布置等がほぼ変わらないので、このまま採用とした。

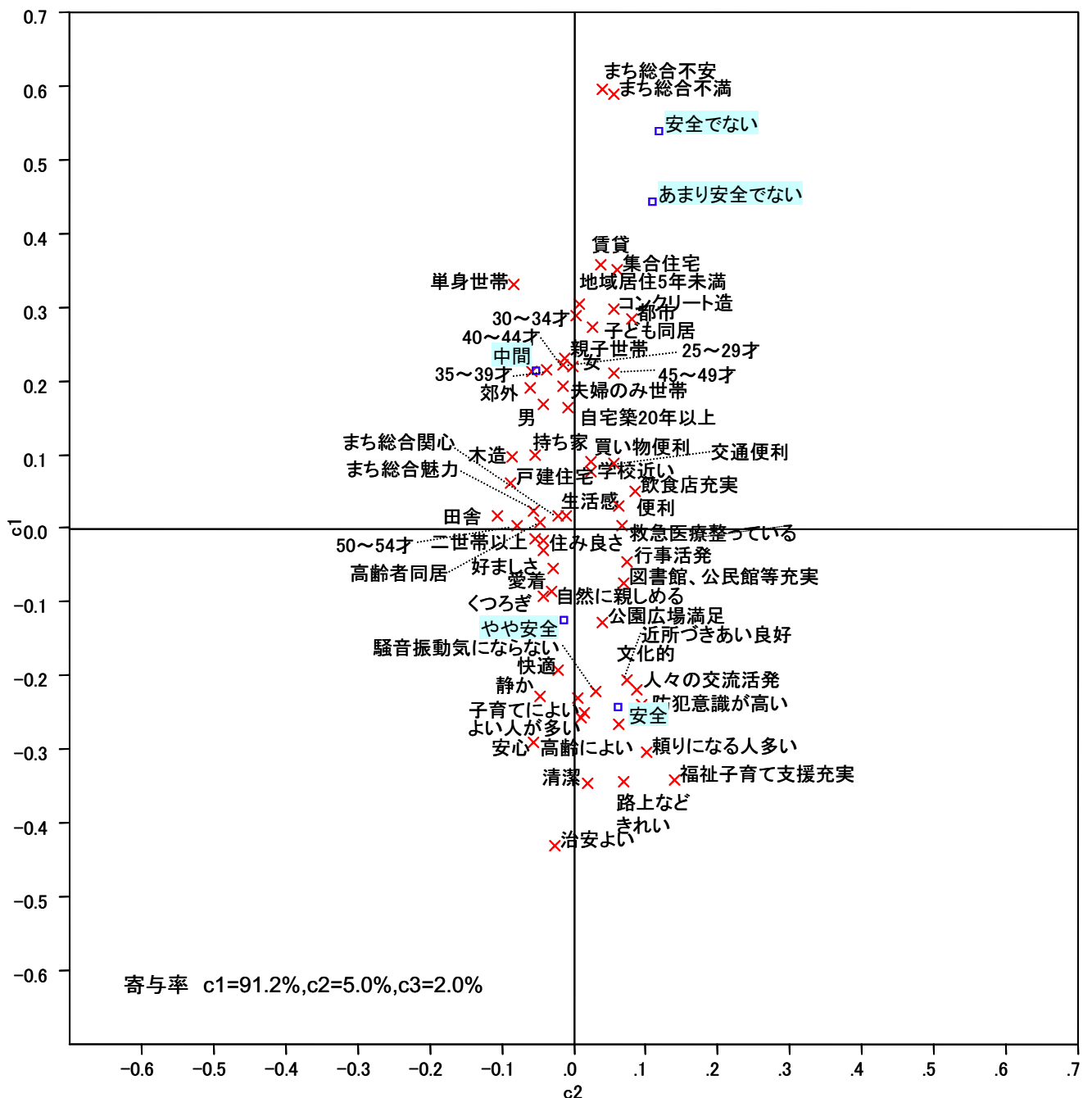


図2-38 「総合安全度」×「個別評価など」の対応分析結果

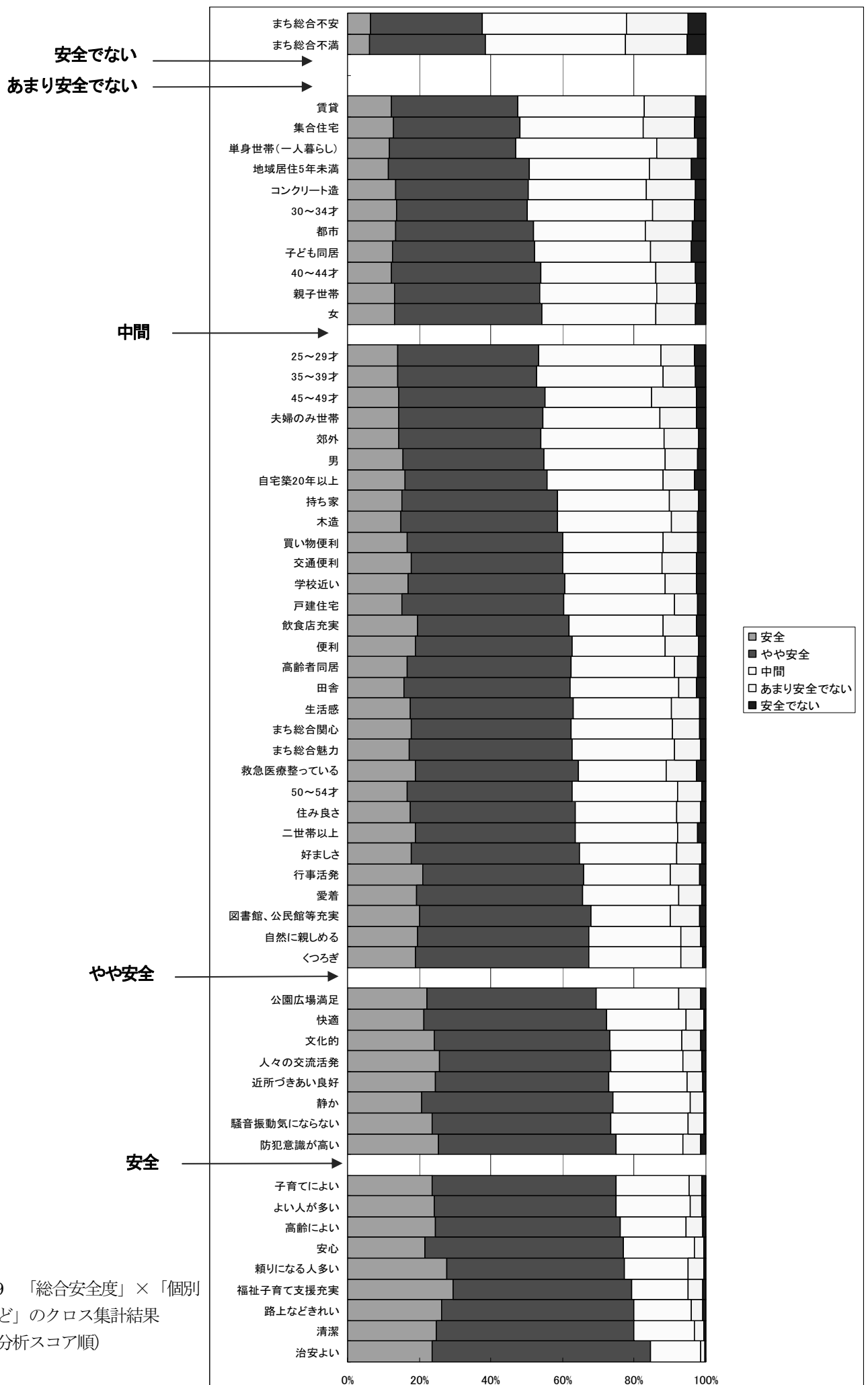


図2-39 「総合安全度」×「個別評価など」のクロス集計結果
(対応分析スコア順)

5) 「不安度」「安心度」「安全度」の比較

今回の分析では、「安心は、安全に比べて総合評価に近い」といった当初想定した関連は明らかにはならなかった。

安心と安全、不安との間に顕著な違いが見られたのは全てフェイス項目であった。認識・評価の項目ではまったく異なる傾向がみられるものはなかった（同じ傾向だが、その顕著さが安心と安全、不安によって異なることはあった）。

三者の結果を比較すると、安心度と安全度が近く、不安度が若干異なっていたが、これは、前者は同じ設間で選択肢も同じ5段階であるのに対し、「不安度」は別の設間で4段階の選択肢であることも影響している。

以下、安心と安全、不安との違いが見られた項目を列記する。

◇個人属性：性別

- ◆ 居住地域への安心感、安全性の認識にほぼ性差はないが、「不安感」は女性に若干強い（図2-40）。

◇世帯属性：1人暮らし、子どもと同居

- ◆ 1人暮らしは、居住地域に安心していないし、安全だとも思っていないが、不安はない（図2-41）。
 - ・ 1人暮らしには若い層が多い。25～29才が36.7%で最多、30歳代前半18.5%、30歳代後半12.5%、40歳代前半14.7%、40歳代後半9.0%、50歳代前半8.5%である。
- ◆ 子どもと同居していても、地域に対する安心感に有意差はないが、不安感には差がある。また、地域を危険だと感じる人も増える（図2-42）。

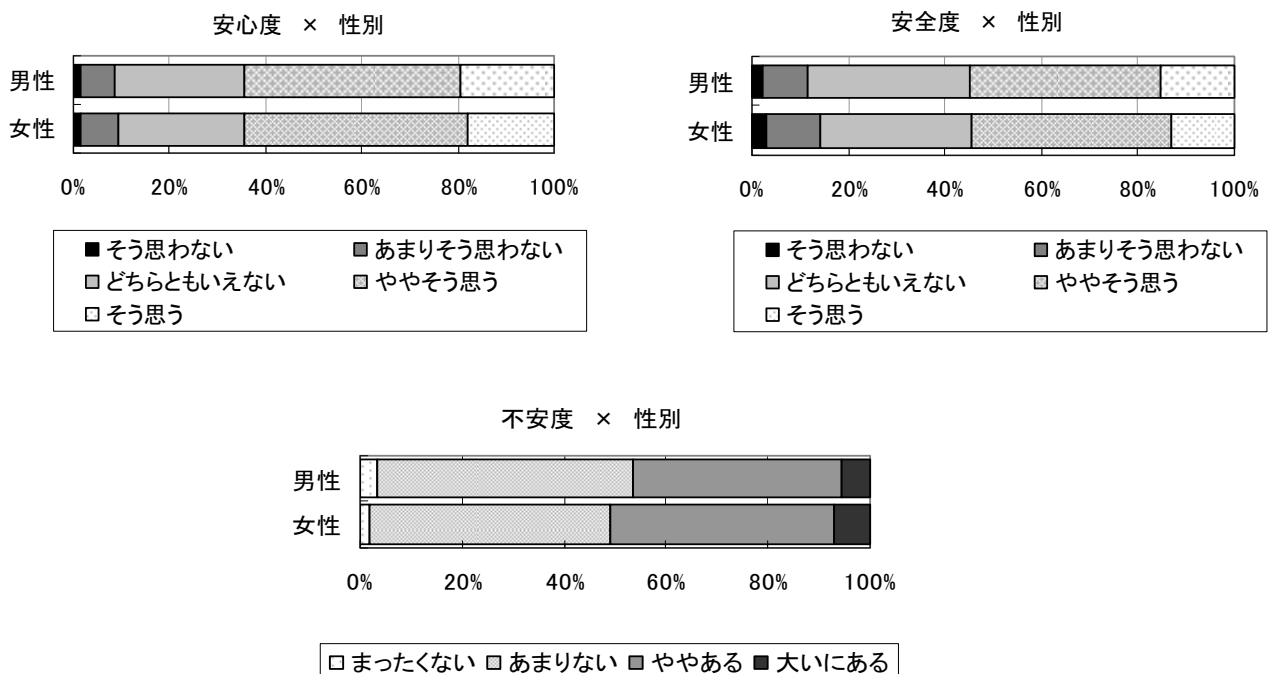


図2-40 「性別」×「安心度」「安全度」「不安度」のクロス集計

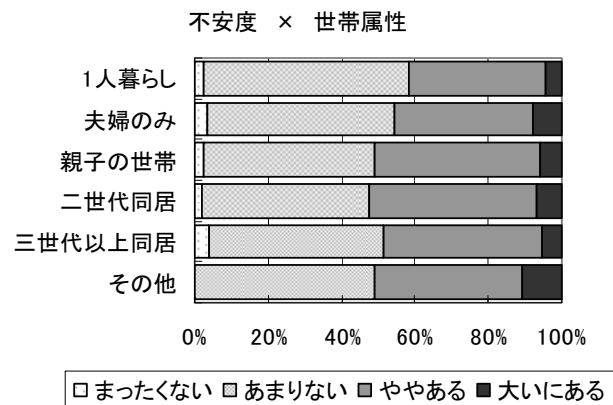
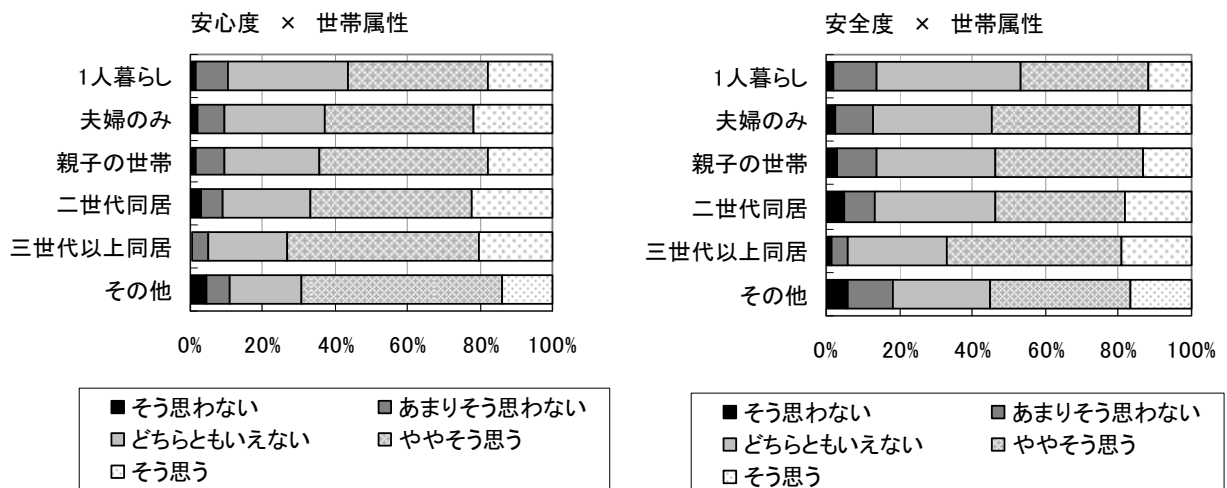


図2-41 「世帯属性」×「安心度」「安全度」「不安度」のクロス集計

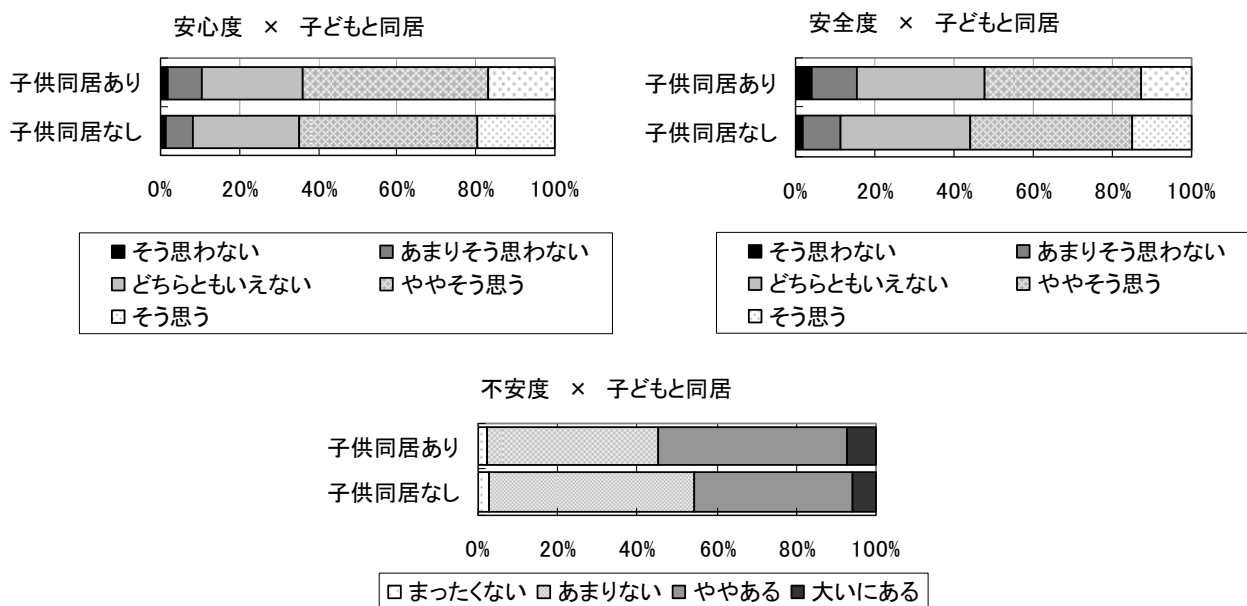


図2-42 「子どもと同居」×「安心度」「安全度」「不安度」のクロス集計

◇ 住居属性：所有形態（住居形態）、地域居住年数

- ◆ 持ち家の方が賃貸よりも、地域に対する安心感、安全性の認識は高いが、不安感は平等である。同じことが一戸建て・集合住宅でもいえるが、もともと賃貸は集合住宅が主なので、同じ関連と考えら

れる（図2-43）。

- ◆ 地域居住年数が長いと、地域に対する安心感、安全性の認識は高まるが、かといって不安感が減るわけではない（図2-44）。

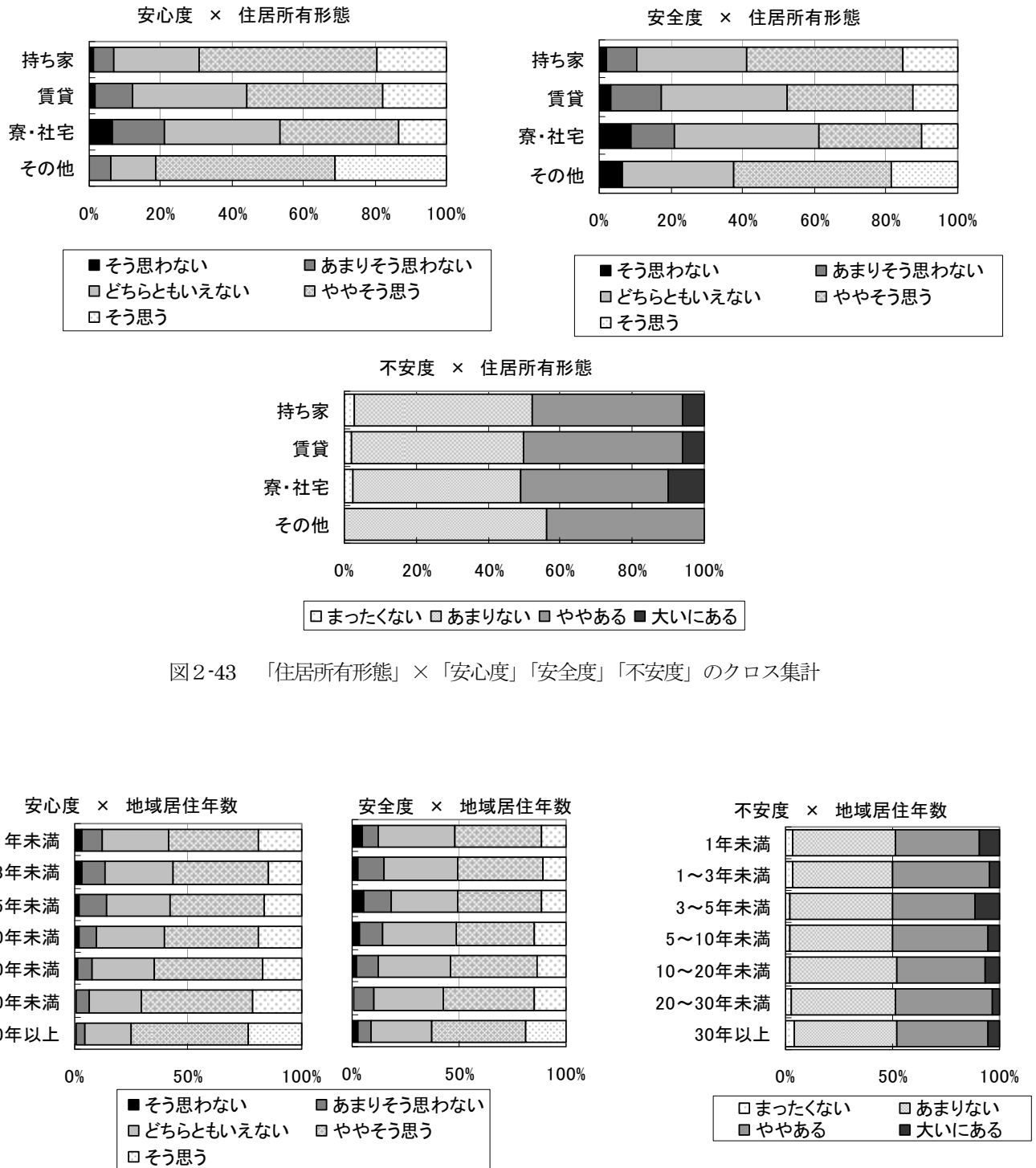


図2-43 「住居所有形態」×「安心度」「安全度」「不安度」のクロス集計

図2-44 「地域居住年数」×「安心度」「安全度」「不安度」のクロス集計

2-2-3. 不安、安心、安全に関する因果関係の検討

1) 分析方針

以上の検討結果と過去の研究成果をふまえ、不安、安全、安心に関する因果関係を、地域、自宅の各々についてグラフィカルモデリング（以下、GM）によって検討した。

●グラフィカルモデリングとは

GMとは、グラフ理論および変数間の条件付き独立性から因果関係を探索する手法である。ここでは、GMのバリエーションの中でも、もっともベーシックな「独立グラフ」のモデリングを行う。独立グラフとは、変数を向きのない線で結んだグラフであり、条件付き独立性の有無、すなわち他の変数が一定という条件のもとで独立か否か（関連があるかないか）を変数間の線の有無に対応させたものである。独立グラフで直接的に線で結ばれた変数間には直接的な因果関係がある可能性がある。直接的な線がない変数間の相関関係は、両変数の間に介在する他の変数によって生じた間接的な因果関係あるいは疑似相関であり、直接的な因果関係はないことが保証される。

なお、分析対象変数が量的変数の場合、条件付き独

立性は偏相関係数（他の変数の影響を除去した相関係数）として表せるため、母集団において偏相関係数が0とみなせるかどうかをモデリングすることになる。

【GMに関する参考文献、既往研究】

- *小島隆矢「Excel で学ぶ分散構造分析とグラフィカルモデリング」オーム社
- *小島隆矢・若林直子・平手小太郎「グラフィカルモデリングによる評価の階層性の検討 -環境心理評価構造における統計的因果分析 その1-」日本建築学会計画系論文集, No.535, pp.47-52, 2000.9
- *小島隆矢・若林直子・平手小太郎「階層的评价構造における因果関係の探索的モデリング -環境心理評価構造における統計的因果分析 その2-」, 日本建築学会計画系論文集, No.556, pp.77-82, 2002.6

●分析対象項目

用いた調査項目は、不安、安全、安心（p.36 参照）に加えて、「住みよい」「くつろげる」「不満がある」「魅力がある」という総合評価であり、具体的には以下の設問になる。

- ◆ お住まいの地域は、住みよい
→ そう思う・思わない 5段階（Q1）
- ◆ ご自宅は、住みよい
→ そう思う・思わない 5段階（Q2）
- ◆ お住まいの地域は、くつろげる

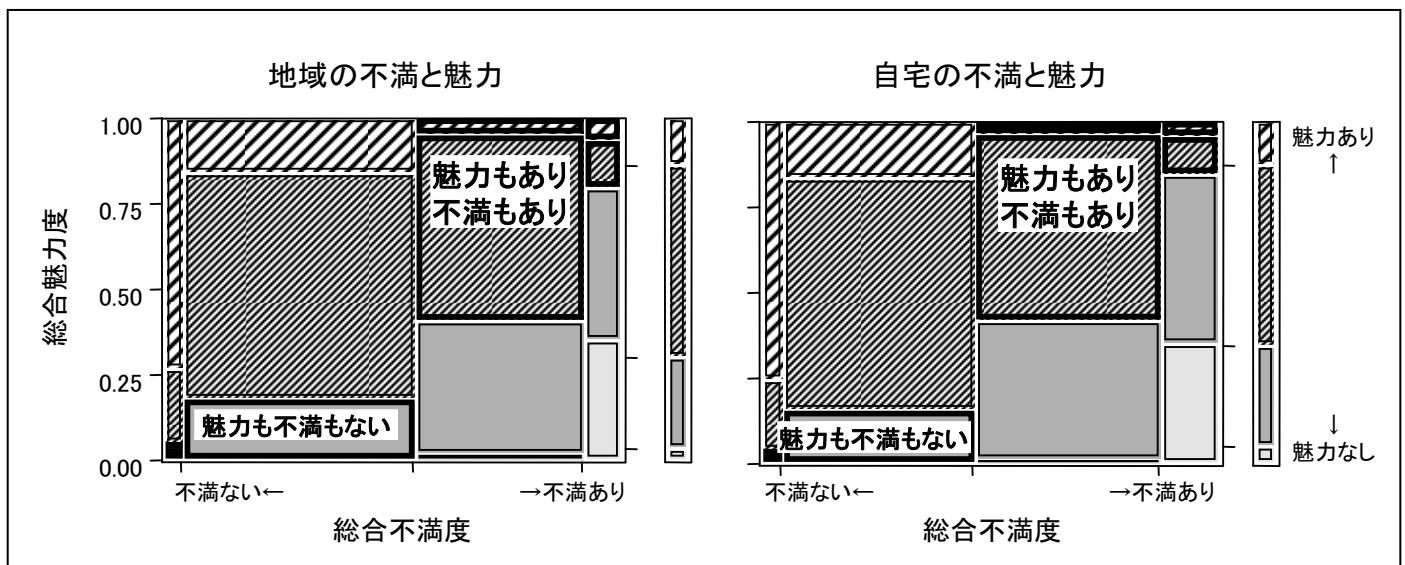


図2-45 地域と自宅の「不満」と「魅力」

→そう思う-思わない 5段階 (Q1)

- ◆ ご自宅は、くつろげる

→そう思う-思わない 5段階 (Q2)

- ◆ お住まいの地域には、不満が、

→大いにある-まったくない 4段階 (Q3)

- ◆ ご自宅には、不満が、

→大いにある-まったくない 4段階 (Q3)

- ◆ お住まいの地域には、魅力が、

→大いにある-まったくない 4段階 (Q4)

- ◆ ご自宅には、魅力が、

→大いにある-まったくない 4段階 (Q4)

なお、「不満がある」「魅力がある」については、各々以下のような教示をしている。

- ◆ あなたが現在お住まいの地域やご自宅に対して感じる「不満」はどの程度ですか。よいところはさておき、不満に感じている点だけを考え、その大きさを評価してください。
- ◆ あなたが現在お住まいの地域やご自宅に対して感じる「魅力」はどの程度ですか。不満な点には目をつぶって、魅力に感じている点だけを考え、その大きさを評価してください。

これは、不満と魅力を別々に評価してもらうための工夫である（小島、若林「地域環境に関する意識調査手法の研究」日本建築学会大会梗概集 D-1 分冊，2004 参照）。結果は、両項目の相関係数は地域で-0.47、自宅で-0.55 と高かったが、図 2-45 に示すとおり、不満もあるが魅力も感じている人や、不満も魅力も感じている人は少なからず存在する。

2) 結果と考察

得られた独立グラフを図2-46に示す。各種適合度の指標は、いずれも良好な値である。

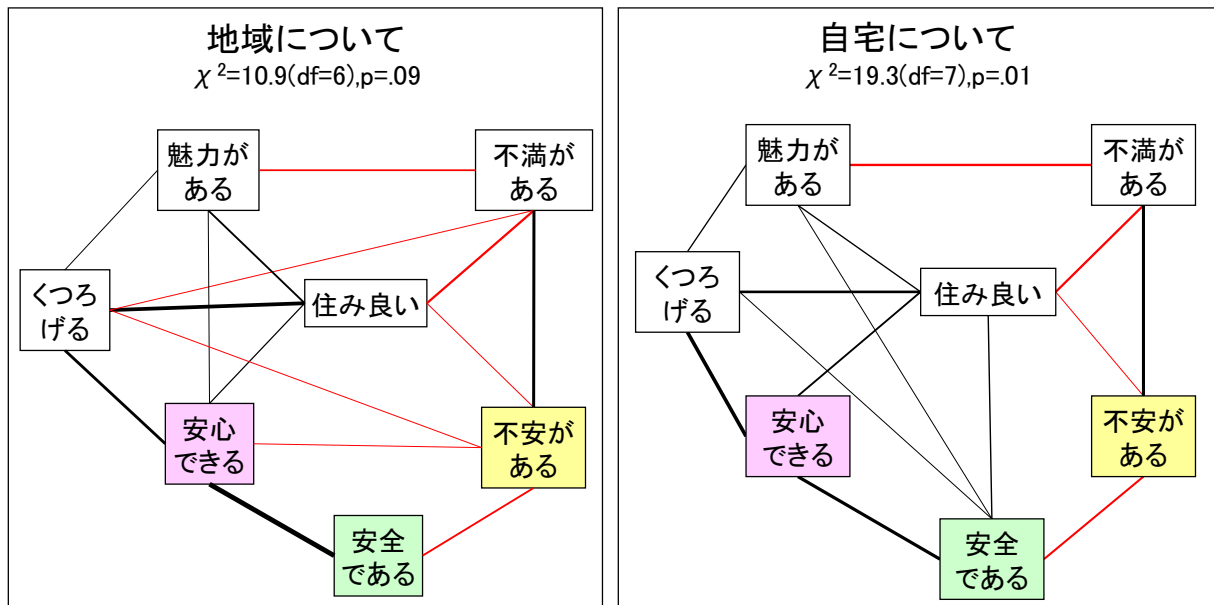
この図から読み取れる主な関連を以下に示す。

- 「不安」について
 - ◆ 「不安」がある地域や自宅は「不満」である。住み良くなり、安全でない。
 - ◆ とくに地域の場合、不安があると、くつろげないし安心できない。
- 「安全」について
 - ◆ 「安全な」地域や自宅は「安心」でき、「不安」がない。
 - ◆ とくに自宅の安全は、住みよさ、くつろぎ、魅力に直接つながっている。
- 「安心」について
 - ◆ 「安心できる」地域や自宅は、「安全」で、くつろぐことができ、住みよい。
 - ◆ とくに地域への安心感とは、地域の魅力に直接つながっている。

不安、安全、安心の違いに着目すると、次のように考察することができる。

- ◆ 「不安」の反対は、「安心」とはいいいにくい（地域のみに関連）。むしろ、「安全」の方が近いかもしれない（地域でも自宅でも関連）。
- ◆ 「安心」は「くつろぎ」「住みよさ」に通じる。「くつろぎ」「住みよさ」は、魅力に直接つながる。
- ◆ 自宅の「安全」では、上記の「安心」と同じことがいえる。つまり、自宅の「安全」は「くつろぎ」「住みよさ」「魅力」につながる。地域の「安全」は、「安心」や「不安」を介さないと、魅力などにはつながらない。
- ◆ 地域の「安心」は、「くつろぎ」や「住みよさ」を介さなくても直接「魅力」につながる。自宅の「安心」では、「くつろぎ」や「住みよさ」を介しての関連である。

なお、ここでは独立グラフに基づき、条件付き独立性のみを考察対象としたが、次のステップとしては、この結果をもとに、因果の向きを含めた検討・分析を行うことが想定される。これは今後の課題としたい。



*線の太さ：偏相関係数の大きさ
*赤い線：マイナスの偏相関係数

図2-46 安全、安心、不安等に関する独立グラフ

2-3. 地域への不安内容（自由記述）に関する検討

2-3-1. アフターコーディングの実施

1) 自由記述の設問文

総合不安度は、具体的には以下のような設問である。

- ◆ あなたが現在お住まいの地域やご自宅における「生活上の安全・安心」に対して感じる「不安感」はどの程度ですか。(Q6)
 - ・「お住まいの地域には、不安が」大いにある～まったくない(4段階)
 - ・「ご自宅には、不安が」大いにある～まったくない(4段階)

この設問で「大いにある」「ややある」と回答した人(地域 1,223 人 48.8%、自宅 1,205 人 48.0%)に対してだけ、以下のようにその具体内容を聞き書いてもらった。

- ◆ 「お住まいの地域(ご自宅)には、不安がある」というご回答ですが、それはどのような不安ですか。具体的にお答えください。(Q6SQ1・2)

2) アフターコーディング

「地域に不安あり」とした 1,223 件の自由記述内容を事後的にコーディングし、0-1 データとした。

なお、Web アンケートの特徴を活かし、「不安あり」にチェックした人のみに自由記述設問が表示され、しかも何か記入をしなければ進めない仕組み(必須項目)とした。このため、「不安あり」にチェックしたものの記入すべき内容がない人は「とくになし」等の記入となった。これらは分析からカットすることとしたが、該当件数は 16 件とごく少数だった。

1,207 件 (=1,223 件-16 件) のアフターコーディングデータの集計を次ページに示す。

カテゴリーは「その他」を含め 74 項目、データ数は 1,895 となった。これらを内容別に分類し、適当な名称をつけたものが「ラベル」である。各ラベル内の度数は表中の【 】内に示した。

3) 不安内容の特徴 ～集計結果より～

「犯罪」に関する記述がもっとも多く、なかでも漠然と「治安」「防犯」等をあげる人が最多だった。具体的な内容では、空き巣や盗難、不審者・変質者などが非常に多かった。

「コミュニティ(近隣関係、地域性等)」「人(居住者、来訪者のマナー、人口構成等)」に関する記述の多さ、内容の多様さも注目に値するという結果である。

- ◆ コミュニティでは、近所づきあいの難しさ(希薄～うとうしい、仲良くやれるか不安)が目立った。
- ◆ 人では、迷惑な居住者、マナーなどが目立った。迷惑な人々は、具体的には、若者(不良やたむろ)、外国人、酔っ払い、暴走族や暴力団などである。マナーは、ゴミの不法投棄、放置自転車、路上駐車、運転マナーなどがあつた。

事前に設問を用意して個別の不安項目を聞いた結果(Q7、p.13)では、「地震で被災」「地震で自宅損壊」「交通事故」なども不安上位の項目だったが、自由記述では、自然災害や事故は多くはなかった。

設問のワーディングの影響もあろうが、転倒転落など、自発的なリスクに繋がりそうな内容はほとんど見当たらなかった。

表2-1 地域への不安内容（自由記述）

ラベル	カテゴリー	内容	度数	
市街地等の状況 【299】	暗い場所・道	(暗い道・人通りが少ない道・暗いところ)	57	
	街灯暗い	(街灯が少ない、街灯が暗い)	35	
	集合住宅	(集合住宅、大型マンション)	8	
	住宅密集・狭隘道路	(道路が狭い・複雑、建物密集)	24	
	道路未整備	(道路・歩道が未整備)	14	
	交通	(交通量が多い、大型車の出入りがある)	28	
	運転マナー	(運転マナー・車スピード出しすぎ・飲酒運転・路上駐車・生活道路の通り抜け)	15	
	建物性能	(建物老朽化、耐震性)	8	
	空家・空地	(空き地、空き家)	8	
	大通り	(大通り近い)	10	
	住宅地	(住宅地)	11	
	都市部	(都心・都市部・駅前)	14	
	繁華街	(繁華街、繁華街に近い)	11	
	閑静・田舎	(静か・田舎(駅が遠い、農業地域、家がまばらなど含む))	35	
	工業地帯	(工業地帯、工場などが近い)	8	
	環境悪い	(環境悪い、汚い、大気汚染)	8	
	騒音	(騒音・やかましい・うるさい)	22	
	集客施設	(集客施設(パチンコ・競輪・大型店等)、風俗店・ラブホテル等)	16	
	河川・山・海	(河川、山、海が近い)	9	
	地形	(坂・段差、低地、)	14	
	迷惑施設	(米軍基地、飛行場、新興宗教、産廃施設、高圧電線、原発など)	15	
	開発	(開発の進行、無秩序な開発)	9	
	犯罪 【515】	治安	(治安、治安が悪い、治安が良くない)	151
		防犯	(防犯上、防犯の問題、セキュリティ)	50
		犯罪	(犯罪、犯罪・事件が多い、パトロールを見かける)	50
		空き巣・盗難	(空き巣・泥棒・盗難事件・自販機あらし)	127
		ひったくり	(ひったくり)	41
		殺人・強盗等	(殺人・強盗事件・凶悪犯罪)	25
		誘拐	(誘拐、連れ去り)	10
不審者		(変質者・不審者)	89	
痴漢・路上犯罪		(痴漢・暴行、路上犯罪、通り魔)	18	
車両被害		(車上狙い、車両へのいたずら、自転車盗難)	39	
軽犯罪		(いたずらなどが多い・軽犯罪)	10	
放火		(放火)	5	
事故・火災 【43】		事故	(事故、事故が多い)	8
		交通事故	(交通事故、交通事故が多い)	25
	火災	(火災、焚き火・野焼きによる山林火災)	10	
自然災害 【61】	自然災害	(自然災害・防災)	13	
	地震・津波	(地震・大地震(避難場所・避難所含む)、津波)	32	
	風水害・土砂災害	(風水害、土砂災害)	19	
対策・取り組み 【30】	対策不十分	(対策不十分)	12	
	警察活動不十分	(警察の活動が不十分、警官少ない、事件未解決)	18	
人口・人口構成 【83】	少子高齢化	(少子高齢化、若者が少ない、高齢者が多い)	51	
	人口少ない	(過疎化の進行、人が少ない、人口密度が低い、昼間人口少、夜間人口少)	21	
	人口多い	(人が多い(不特定多数等)、出入りが激しい、人口増加)	16	
居住者の種類 【116】	迷惑な人	(ガラが悪い人、たむろ、酔っ払い、おかしな人、暴力団)	42	
	迷惑な若者	(不良少年、若者たむろ、暴走族)	35	
	外国人	(外国人が多い・外国人の犯罪)	33	
	単身者	(単身者)	3	
	子供	(子供が多い)	2	
	ホームレス	(ホームレス等)	8	
近隣コミュニティ 【110】	近所づきあい	(近所づきあい(そのもの)、母親同士のつきあい)	4	
	近所づきあい希薄	(近所づきあい希薄・災害時の助け合いが期待できない)	43	
	近所づきあい苦痛	(近所づきあいうとうしい、いや、うるさい、むずかしい、プライバシー侵害)	11	
	地域の団結なし	(住民が無関心・不親切・まとまりがない(自治会、協力し合う心…))	8	
	新住民	(新住民・知らない人)	10	
	旧住民VS新住民	(旧住民VS新住民、排他的、閉鎖的)	11	
	近所の人知らない	(近所の人を知らない、人の入れ替わりが多い)	24	
	地域を知らない	(地域を知らない、情報ない)	9	
地域性・日常生活 【206】	防犯意識低い	(防犯意識が浅い・薄い、鍵をかけない地域性・習慣)	9	
	マナー・モラル	(マナー・素行・モラル、民度・文化水準が低い、人に不満あり、ゴミ・放置自転車)	32	
	政治・経済	(政治・政策・行政・経済・景気)	46	
	地域振興	(活性化していない、地域振興、地域の発展)	17	
	不便	(不便・住みにくい)	21	
	医療	(病院・救急医療施設が近くにない)	21	
	教育	(教育)	8	
	福祉	(福祉、福祉施設、高齢者施設、子育て支援)	14	
	買い物	(買い物不便)	28	
	交通の便	(交通が不便、車が必須)	43	
	その他 【190】	なんとなく不安	(なんとなく不安・どこであろうと不安・100%安全はあり得ない)	28
高齢化		(老後の不安・高齢化にともなう不安)	18	
子供のこと		(子供のこと)	68	
夜不安		(夜不安)	51	
その他		(その他)	29	

2-3-2. 個人属性との対応分析

どのような人がどのような不安を抱えているかの傾向を探るため、自由記述内容（74 カテゴリー）と個人属性とのクロス集計に基づき、対応分析を行った。

分析に使用する個人属性の項目は、これまでの検討結果から以下に絞った。

- ◆ 性別（2水準）
- ◆ 年齢（6水準）
- ◆ 子ども同居（同居しているか否か）
- ◆ 単身世帯（単身世帯か否か）

結果の3次元布置図は図2-47である。この図からは、いくつかの特徴的な傾向が読み取れる。

- ◆ 女性は、年代等を問わず、近所づきあい（知らない、希薄から苦痛まで）や住民などに関する不安が多い。街灯の暗さ、暗い場所や道、夜、路上犯罪、痴漢、ひったくりなどにも不安を持つ。
- ◆ 20代など、若い男性の不安要素は、住宅密集や狭隘道路、迷惑な若者、騒音、交通などである。また、地域振興（活性化していない、地域の発展等）を不安に思うのも、この層の特徴である。
- ◆ 子どもと同居していると、誘拐や不審者、交通事故や道路状況（大通りに近い、道路が未整備等）を不安視する傾向がある。環境の悪さ、繁華街、工場地帯なども不安要素である。
- ◆ 単身者は、「地域を知らない」また「自分の対策が不十分である」といった認識があり、放火・自然災害を不安視する傾向がある。

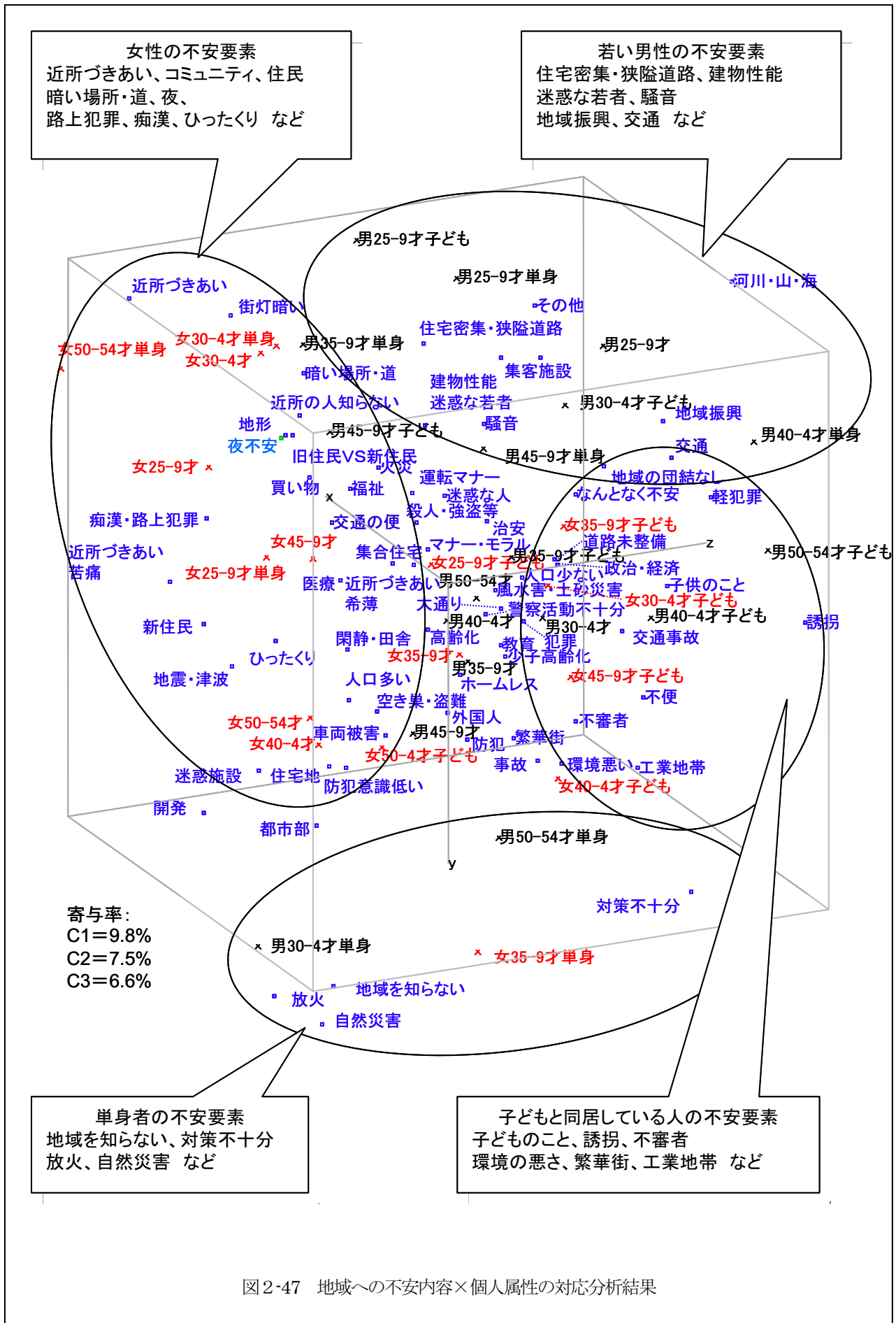


図2-47 地域への不安内容×個人属性の対応分析結果